金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究（三）

小川　隆　池上　光洋
林　鳴宇　小早川浩大
三宅　良幹

目次

凡例
〔十五〕(115) 大潙衆生無仏
〔十六〕(116) 大慧如鏡鋳像
〔十七〕(117) 瑫禅師古鏡話
〔十八〕(118) 仰山問一答十
〔十九〕(119) 趙州庭前柏樹
〔二〇〕(120) 進山主生不生
〔二一〕(121) 麻谷鋤頭鋤草
〔二二〕(122) 玄則丙丁童子
〔二三〕(123) 宝徹無処不周
〔二四〕(124) 深明見人牽網
〔二五〕(125) 曹山如井覷驢
〔二六〕(126) 大巓良久機縁
〔二七〕(127) 文殊前三後三
〔二八〕(128) 百丈入理之門
後記

凡　例

一、本稿は金沢文庫本『正法眼蔵中』一五～二八則の原文・訓読・現代語訳・出典・注釈である。真字『正法眼蔵』（『正法眼蔵三百則』または単に『三百則』とも呼称）には、他に真法寺旧蔵本（黄泉本または伊勢氏旧蔵本とも、現在河村孝道氏所蔵）・永昌院本・成高寺本・松源院本・大安寺本（下巻のみの端本）・拈評三百則本・丈六寺本（上巻のみの端本／拈評本の稿本）の七種の異本が現存するが、本稿は和語化への生々しい痕跡を有する金沢文庫本の忠実な訓読と現代語訳を目的とするため、細かな異本校合は行わなかった。

一、底本には『永平正法眼蔵蒐書大成　一』（大修館書店一九七八年）所収の金沢文庫本を用いた。金沢文庫本は、句読訓点や唐音読みを残す国語史的にも貴重な資料であるが、底本は『蒐書大成』〈影印〉や『金沢文庫資料全書』第一巻・禅籍篇〈翻刻〉（神奈川県立金沢文庫一九七四年）等によって比較的容易に参照できるため、原文は漢字のみとし、文字も通用の新字体に統一した。また、読解の便宜のため、底本に朱筆で打たれた読点を極力尊重しつつ、あらたに標点を施した。

一、本稿では検索の便を考慮して、各則のはじめに金沢文庫本における通し番号、三百則全体の通し番号、および表題を太字で付した。金沢文庫本の通し番号は、底本中に十則ごとに書かれる通し番号を元にし、〔　〕内に漢数字で表記した。但し、脱丁部分にあたる五七則から六七則、および七六則から八一則は欠番扱いにし、八二則は後半部分が存在するので則数に入れた。三百則全体の通し番号は、石井修道校注『道元禅師全集』五（春秋社一九八九年）の通し番号を付し、（　）内に算用数字で表記した。表題も同書の目次（凡例所載）を借用した。

一、訓読は、底本の句読訓点を忠実に再現するよう努めた。底本には漢字の左右に振り仮名が振られ、一文に訓読みと音読みを併記する例が存在するが、本稿ではまず右側の振り仮名を基準として訓読文を作成し、左のものは（　）に入れてその直後に記し、右傍訓右のものは（右・　）、頭注は（頭・　）と表記した。また、底本の振り仮名は全て片仮名で濁音表記は一切無く、促音表記等も不統一であるが、読み易さを考慮して訓読には濁点と必要最小限の振り仮名を追加した。但し、底本の振り仮名と混同しないため、本稿で新たに付加したものは平仮名で表記した。また、古用仮名は一律に現行の片仮名に改めた。不読文字は〈　〉に入れて表記した。

一、現代語訳は、訓読文をもとに訳出したものである。近年、漢語史研究の進展により、従来の禅籍の読み方が再検討されてきているが、本稿では、道元が漢語をどのように理解し、それを和語でどう表現したのか、その過程を明かすことを目的としているため、現在の語学的見地から見てたとえ不適切な読み方であったとしても、敢えて訓読文に忠実な翻訳を試みた。原語の意味と訓読の解釈に相違があると考えた場合は、注にその旨を記した。

一、出典は道元が古則をどう理解し、どう変更を加えたかを明らかにするために付した。但し、出典研究自体は既に行われているため、本稿では細かな考証は行わず、鏡島元隆監修『道元引用語録の研究』（春秋社一九九五年）の成果に従い、第一出典を（A）、第二出典を（B）として表示した。

一、注は本則を読むために必要な情報を載せ、道元禅の思想的展開の上で重要な事項がある場合には、最後に補注を付けた。また、引証に用いた文は、注釈者の解釈を明らかにするため全て書き下しにした。但し、金沢文庫本や祖山本『永平広録』等の古い訓読を残す文を引く場合は、その訓読に従った。その場合は、書き下し文を片仮名で表記して区別した。尚、注番号は原文中に付した。本稿の目的からすると訓読文中に付すべきであるが、訓読文には多数の振り仮名などが付されているため、いたずらな混乱を避ける処置である。

一、本稿で引用する主な文献は、以下のものを用いた。出典や注においてそれらのものを使用した場合は、書名・巻数・頁数のみを記した。但し、灯史類を使用した場合は、巻数の次に祖師名を明記した。引用が数頁にわたる場合は、その先頭の頁数を表記した

真字『正法眼蔵』（石井修道校注『道元禅師全集』五・春秋社一九八九年）は、則数のみを表記し、頁数等は省略した。

仮字『正法眼蔵』（水野弥穂子校注・岩波文庫一九九〇年）は、『正法眼蔵』「観音」巻と表記し、（　）内に巻数と頁数を表記した。尚、岩波文庫本に不載の巻は河村孝道校注『道元禅師全集』二（春秋社一九九三年）を用い、（全集二・〇〇頁）と表記した。

『永平広録』（渡部・大谷監修『永平広録考注集成・祖山本』一穂社一九九八年）

『正法眼蔵随聞記』（東隆真編『五写本影印・正法眼蔵随聞記』圭文社一九八〇年）

その他の道元の著作は春秋社の『道元禅師全集』によった

『大正新修大蔵経』は大正○○・○○○a、『卍続蔵経』は続蔵○○・○○○dと表記した。

『祖堂集』（基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年）
『景徳伝灯録』（基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九〇年）
『宗門統要集』（柳田・椎名編・禅学典籍叢刊一・臨川書店一九九九年）
『天聖広灯録』（柳田聖山編・禅学叢書五・中文出版社一九七五年）
『聯灯会要』（続蔵一三六八）
『嘉泰普燈録』（続蔵一三七）
『建中靖国続灯録』（続蔵一三六八）
『臨済録』（入矢義高訳注・岩波文庫一九八九年）
『趙州録』（秋月龍珉訳注・禅の語録一一・筑摩書房一九七二年）
『洞山録』（柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年）
『曹山録』（柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年）
『仰山録』（柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年）
『宏智録』（石井編・禅籍善本古注集成・名著普及会一九八四年）
『明覚録』（柳田・椎名編・禅学典籍叢刊二・臨川書店一九九九年）
『雪竇頌古』（入矢他訳注・禅の語録一五・筑摩書房一九八一年）
『圜悟録』（大正四七）
『碧巌録』（入矢・溝口他訳注・岩波文庫一九九二年）
『大慧録』（大正四七）
大慧『正法眼蔵』（柳田・椎名編・禅学典籍叢刊四・二〇〇〇年）
『従容録』（基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年）
『如浄録』（大正四八）

『禅門諸祖師偈頌』（続蔵一一六）
『禅門拈頌集』（柳田・椎名編・禅学典籍叢刊七・臨川書店一九九九年）

一、各則の担当者名は「後記」に記した。
一、本稿は駒澤大学禅研究所外国語禅籍研究班の活動報告として発表するものである。

訳注

〔十五〕（115）大潙衆生無仏

大潙嘗示衆云：「一①切衆生無仏性。」因塩官或示衆云：「一④切衆生有仏性。」塩官会有二僧，遂特詣師会探之。既到，所聞説法，莫測其涯，若生軽慢。一日在庭中坐次，見仰⑤山来，遂勧曰：「師兄，切須勤学仏法，不得容⑥易。」仰山遂作一⑦円相托⑧呈，却抛⑨向背後，復⑩展両手就二僧索，二僧茫然不⑪知所措。仰山乃勧云：「直須勧⑫〔勤〕学仏法，不得容易。」珍⑬重便去。二僧逮返塩官，将行三十里，⑭一人忽然有省，自嘆云：「当知潙山云，一切衆生無仏性，誠不錯也。」却⑮廻潙山。一人又行数里，因渡水亦有省處。自嘆云：「潙山道，一切衆生無仏性。灼⑯然有他与麼道。」亦返潙山。

〈書き下し〉

大潙、嘗テ衆ニ示シテ云ク、「一切衆生無仏性。」因ニ塩官、或トキ衆ニ示シテ云ク（衆に示して云フコト或リ）、「一切衆生有仏性。」塩官ノ会ニ二僧有リテ、遂ニ特サラ師ノ会ニ詣デテ之ヲ探ス。（之ヲ探ルニ、）既ニ到レレドモ（到テ）、聞ク所ノ説法、其ノ涯ヲ測ルコト莫シ、軽慢ヲ生ズルガ若シ。一日、庭中ニ在テ坐スル次ニ、仰山ノ来ルヲ見テ、遂ニ勧メテ曰ク、「師兄、切ニ須ク仏法ヲ勤学スベシ、容易ニスルコト（容易ナルコト）得不レ。」仰山、遂ニ一円相ヲ作シテ（右・作リテ）托呈シテ（托呈シテ）、却タ背後ニ（背後ニ）抛向シテ、復タ両手ヲ展ベテ二僧ニ就テ索ムルニ、（索フ。）二僧、茫然トシテ措ク所ヲ知ラ不。仰山、乃ち勧メテ云ク、「直ニ須ク仏法ヲ勧〔勤〕学スベシ、容易ニスルコト（容易なること）得不レ。」珍重（珍重シテ）便チ去ル（去ヌ）。二僧、塩官ニ返ヘルニ逮ムデ、行クコト三十里ニ将スルニ、一人、忽然トシテ省ラムルコト有リ。自ラ嘆ジテ云ク、「当ニ知ルベシ、潙山ノ云フ一切衆生無仏性ハ（潙山、一切衆生無仏性ト云う）、誠ニ錯ラ不〈也〉（不錯也）。」却タ潙山ニ廻ル。一人、又タ行クコト数里スル。因ニ水ヲ渡タルニ亦タ省ムル処有リ。自ら嘆ジテ云く、「潙山道フ、一切衆

生無仏性。灼然トシテ、他与麼道有リ。」亦た潙山ニ返ヘル。

〈現代語訳〉

潙山霊祐禅師は嘗て大衆に示して「一切衆生無仏性」と説いた。いっぽう塩官斉安は、ある時、大衆に示して「一切衆生有仏性」と言った。そこで、塩官会下の二人の僧が、わざわざ潙山の会に探りに訪れた。だが、やっては来たものの、そこで耳にした説法についてその極みを測り知ることはなく、軽侮の念を生じたようであった。

ある日、庭で坐っていた時、（潙山の弟子の）仰山が来たのを見て、そこで忠告してこう言った。「師兄よ、是非とも力を尽して〝仏法〟を学ばねばなりません。軽々であってはなりません。」仰山はそこで一円相を描いて、それをうやうやしく差し出し、今度はそれを背後に放り投げ、そして再び両手を差し出して二人の僧にものを求める恰好をした。二人は茫然として、どうして良いかわからなかった。そこで仰山の方が忠告して言った。「それこそ力を尽して〝仏法〟を学ばねばなりません。軽々であってはなりません。」そして、あいさつして立ち去った。

二人は、塩官の下へ帰ろうとして、三十里ほどになろうかというところで、一人が突如はっとした。そして、自ら嘆息して言う、「知らねばならぬ、潙山のいう〝一切衆生無仏性〟は、確かに間違っていないのだ。」そうして潙山のもとへと引き返していった。もう一人は、さらに数里歩いて行った。川を渡る時にやはりはっとした。そして、自ら嘆息して言う、「潙山は〝一切衆生無仏性〟と言った。確かに、彼がそう言った通りのことがあるのだ。」こうして、この僧もまた潙山の下へと戻っていったのであった。

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻四（八八頁a）

（B）『聯灯会要』巻七（続蔵一三六・二七一頁c）

〈注〉

①大潙＝潙山霊祐（七七一～八五三）のこと。一〇三則・一一〇則に既出の他、『三百則』では、計二七則にその名が見え、本書で最もよく取り上げられる禅者の一人。

②一切衆生無仏性＝『仰山録』（大正四七・五八三頁a）の本則では「一切衆生皆無仏性」と作る。「一切衆生有仏性」（注④参照）

に対する反措定。

③塩官＝杭州（浙江省）の塩官鎮国海昌院に住した斉安（〜八四二）のこと。馬祖道一の法嗣で、潙山の法叔にあたる。『景徳伝灯録』巻七等に語を録す。

④一切衆生有仏性＝一一四則注⑥参照。『仰山録』（大正四七・五八三頁a）では「一切衆生皆有仏性」に作る。塩官の碑文、盧簡求「杭州塩官県海昌院禅門大師塔碑」にも次のように見える、「且つ曰く、胎卵湿化、仏種に非ざること無し、行住坐臥、皆な是れ道場なり。方便もて随迎し、各おの性類安ず。妙心法眼に、其れ限り有らん乎」（『文苑英華』巻八六八、『全唐文』巻七三三）。

⑤仰山＝仰山慧寂（八〇七〜八八三）のこと。潙山霊祐の法嗣。一〇三則・一一〇則に既出。

⑥容易＝安易にする、軽率にする。『旧唐書』巻五二・后妃伝下・粛宗張皇后、「太子、之を労いて曰く、産（出産）は労を作すを忌む、安んぞ容易にす可けん」（中華書局標点本・二一八五頁）。底本左傍訓で「やすらか」と訓むのは、文字どおりの「容易」「たやすい」の意か。『今昔物語』三〇・一「遣戸ヲ引ケバ、安ラカニ開ヌ」（日本古典文学大系二六『今昔物語集』岩波書店一九八一年・二一三頁）。『日葡辞典』、「Yasuracani. ヤスラカニ（安らかに）　副詞．容易に」（岩波書店一九八〇年・八一二頁b）。

⑦一円相＝言語表現を越えた真如の当体を表すものとして、仰山は問答でしばしばこれを用いた。例えば、『景徳伝灯録』巻一一・仰山慧寂章に次のような例が見える。「問う、如何なるか是れ祖師意。師、手を以って空に於いて円相を作し、相中に仏字を書す。僧、語無し」（一七三頁a）。「韋宙、潙山に就いて一伽陀を請う。潙山曰く、覿面に相い呈するも、猶お是れ鈍漢なり。豈に況んや紙筆に形すをや。乃ち師（仰山）に就いて請う。師、紙上に一円相を画き、注して云く、思いて之を知るは第二頭に落ち、思わずして知るは第三首に落つ、と」（一七〇頁a）。また『祖庭事苑』巻二・円相（続蔵一一三・二〇頁a）や『人天眼目』巻四・円相因起（続蔵一一三・四三七頁a）に仰山の円相に関する記述が見える。

⑧托呈＝両手でうやうやしく差し出す。『宗門統要集』巻二・耽源応真章、「師（耽源）、因みに、仰山、門に入るや、一円相を画き、手を以て托呈し、却た叉手して立つ。師、両手を以て交過し、拳を握りて之に示す（両手を交差させて、そんなモノは受けとれぬという態度を示した）。仰山、進前すること三歩し、女人拝を作す（主人公の使いとしてちゃんとモノをお届けしましたというみぶり）。師、点頭く而已。」（三四頁b）。

⑨抛向＝放り投げる、放り捨てるという動詞「抛」に、動作の向かっていく方向を表す介詞「向～」がついたもの。～に放り投げる。うやうやしく差し出した円相を背後に放り捨てたのは、二僧が実体視している「仏法」（「一切衆生悉有仏性」）なるモノを放擲して見せるという意を表すであろう。『景徳伝灯録』巻七・帰宗智常章、「師、新到の僧に問う、什麼処よりか来る。僧云く、鳳翔より来る。師云く、還た那箇を将ち得来る否。僧云く、将ち得来れり。師云く、什麼処にか在る。僧、手を以て頂従り擎捧て之を呈す。師、即ち手を挙げて接る勢を作し、背後に抛向つ。僧、無語。師云く、這の野狐児！」（一一四頁ａ／禅文化研究所訓注本第三冊・八九頁）。

⑩復展両手就二僧索＝両手を差し出して二僧に何ものかを要求した。円相すなわち「仏法」なるモノを捨て去ったうえで、さあ、そなたらは何を呈示しうるか。「一切衆生無仏性」ないしそれに代わるものを、如何に示しうるかという無言の詰問。「索」は求む。一一〇則、「門人ノ呈語ヲ索ム」。

⑪不知所措＝どうしたら良いかわからない、の意。一〇一則に既出の「措クコト罔シ」と同じ（注⑦参照）。

⑫勤学＝直前の二僧の言葉からみて、明らかに「勤学」の誤り。金沢文庫本・永昌院本以外の『三百則』諸本、ならびに『宗門統要集』、『聯灯会要』ともに「勤学」に作る。

⑬珍重＝別れ際の挨拶をする意。一〇四則注⑩参照。

⑭里＝唐代の一里は約五五〇メートル。

⑮却廻＝二字で「かえる」の意。本書では、しばしば「却回りて」と「却た」の訓みを併記する。一〇四則注⑪参照。

⑯灼然＝たしかに、明らかに。五七則「…泉曰く、智不到の処、作麼生か宗とす。師（道吾宗智）曰く、切に道著を忌む。泉云く、灼然にも、道著せば頭角生ずるなり」。『唐摭言』、「公、之を覧て憮然とし、因りて曰く、十年見わざるも、灼然に錯らざるなり」（『太平広記』巻一五八・欧陽澥・中華書局標点本一一三四頁）。

《補注》

前則と同様、「仏性」をテーマとする。『正法眼蔵』「仏性」巻において同内容を取り上げている。

杭州塩官県斎安国師は、馬祖下の尊宿なり。ちなみに衆にしめしていはく、「一切衆生有仏性」。いはゆる「一切衆生」の言、すみやかに参究すべし。一切衆生、その業道依正ひとつにあらず、その見まちまちなり。凡夫外道、三乗

五乗等、おのおのなるべし。いま仏道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆゑに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆゑに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。草木国土これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有仏性なり。日月星辰これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有仏性なり。国師の道取する有仏性、それかくのごとし。もしかくのごとくにあらずは、仏道に道取する有仏性にあらざるなり。いま国師の道取する宗旨は、「一切衆生有仏性」のみなり。さらに衆生にあらざらんは、有仏性にあらざるべし。しばらく国師にとふべし、「一切諸仏有仏性也無」。かくのごとく問取し、試験すべきなり。「一切衆生即仏性」といはず、「一切衆生、有仏性」といふと参学すべし。有仏性の有、まさに脱落すべし。脱落は一条鉄なり、一条鉄は鳥道なり。しかあれば、一切衆生有衆生なり。これその道理は、衆生を説透するのみにあらず、仏性をも説透するなり。国師たとひ会得を道得に承当せずとも、承当の期なきにあらず。今日の道得、いたづらに宗旨なきにあらず。又、自己に具する道理、いまだかならずしもみづから会得せざれども、四大五陰もあり、皮肉骨髄もあり。しかあるがごとく、道取も、一生に道取することもあり、道取にかかれる生々もあり。

大潙山大円禅師、あるとき衆にしめしていはく、「一切衆生無仏性」。

これをきく人天のなかに、よろこぶ大機あり、驚疑のたぐひなきにあらず。釈尊説道は「一切衆生悉有仏性」なり、大潙の説道は「一切衆生無仏性」なり。有無の言理、はるかにことなるべし、道得の当不、うたがひぬべし。しかあれども、「一切衆生無仏性」のみ仏道に長なり。塩官有仏性の道、たとひ古仏とともに一隻の手をいだすにこたりとも、なほこれ一条拄杖両人舁なるべし。

いま大潙はしかあらず、一条拄杖呑両人なるべし。いはんや国師は馬祖の子なり、大潙は馬祖の孫なり。しかあれども、法孫は、師翁の道に老大なり、法子は、師父の道に年少なり。いま大潙道の理致は、「一切衆生無仏性」を理致とせり。いまだ曠然縄墨外といはず。自家屋裏の経典、かくのごとくの受持あり。さらに摸車すべし、一切衆生なにとしてか仏性ならん、仏性あらん。もし仏性あるは、これ魔黨なるべし。魔子一枚を将来して、一切衆生にかさねんとす。仏性これ仏性なれば、衆生これ衆生なり。衆生もとより仏性を具足せるにあらず。たとひ具せんともとむとも、仏性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり。張公喫酒李公酔といふことなかれ。もしおのづから仏性あらんは、さらに衆生にあらず。すでに衆生あらんは、つひに仏性にあらず。

このゆゑに百丈いはく、「説衆生有仏性、亦謗仏法僧。説衆生無仏性、亦謗仏法僧」。しかあればすなはち、有仏性といひ無仏性といふ、ともに謗となる。謗となるといふとも、道取せざるべきにはあらず。

且問你、大潙、百丈しばらくきくべし。謗はすなはちなきにあらず、仏性は説得すやいまだしや。たとひ説得せば、説著を罣礙せん。説著あらば聞著と同参なるべし。また、大潙にむかひていふべし。一切衆生無仏性はたとひ道得すといふとも、一切仏性無衆生といはず、一切仏性無仏性といはず、いはんや一切諸仏無仏性は夢也未見在なり。試挙看。（一・一〇六頁）

〔十六〕（116）大慧如鏡鋳像

①南岳山大慧禅師，因僧問：「如②鏡鋳像，光帰何処？」師曰：「大③徳未出家時相貌，向甚処去？」僧曰：「成後為甚不④鑑照？」師曰：「雖⑤不鑑照，瞞他一点也不得。」

〈書き下し〉

南岳山大慧禅師、因ニ僧問フ、「鏡ヲモテ像ニ鋳ルガ如キハ（如鏡鋳像）、光リ何ノ処ニカ帰スル（光帰何処）。」師曰く、「大徳の未出家ノ時の相貌、甚レノ処ニ向ってか去ル。」僧曰く、「成リテ後（成リ後リテ）為甚カ鑑照オせ不ル。」師曰く、「鑑照せ不ト雖ドモ、他ヲ瞞ズルコト（瞞他）一点（点）モ也た得不（也不得）。」

〈現代語訳〉

南岳山の懐譲禅師。あるとき僧が質問した、「鏡を溶かして像を鋳造する場合、その鏡の光はいったいどこに行ってしまうのでしょうか。」懐譲、「そなたの出家する前の顔立ちは、どこに消えてしまったのか。」僧、「出来あがった後は、どうしてものを映し出さないのでしょうか。」懐譲、「映し出さずとも、わずかもそやつをごまかすことはできぬ。」

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻三（四六頁b）

（B）『景徳伝灯録』巻五（七七頁a）

『天聖広灯録』巻八（四〇四頁b）

『聯灯会要』巻四（続蔵一三六・二四三頁c）

大慧『正法眼蔵』巻上（二五頁b）

〈注〉

①南岳山大慧禅師＝南岳懐譲（六七七～七四四）のこと。一〇一則に既出。

②如鏡鋳像…＝鏡は個々人が本来有する心性の喩え。像はその本来性が受肉した五蘊身、すなわち自己の現実態をいう。汚れた五蘊身のうちにも本来性は存在しているのかという問い。

③大徳未出家時相貌…＝父母未生以前の面目（本来性）はどこへも行っていない、という反語。

④鑑照＝鏡がものを映し出すはたらき。本来性の放つ霊妙な作用の喩え。僧の言は、しかし、五蘊身の上に本来性の輝きは表れ出ていないではないか、という反駁。

⑤雖不鑑照、瞞他一点也不得＝「他（かれ）」は本来人、本来性の自己。「一点」はわずか、ほんの少しの意。「瞞他一点也不得」とは、わずかも「他」に隠しだてをし、あざむくことはできぬということ。本来性は現実態に同化し、本来性が本来性のまま顕現することはない。しかし、だからといって本来性が撥無されることはなく、五蘊身の現実の営為がそのまま本来性の霊妙な作用そのものなのだ、というこころ。

《補注》

本則は『正法眼蔵』「古鏡」巻に引かれるほか、『永平広録』巻五・上堂四一一にも引用されている。また、『正法眼蔵』「古鏡」巻では鏡と像の関係を「鏡は金にあらず玉にあらず、明にあらず像にあらずといへども、たちまちに鋳像なる、まことに鏡の究弁なり」（二・一九頁）と語る。「雖不鑑照、瞞他一点也不得」の一句については、『正法眼蔵』「古鏡」巻に「鑑照不得なり、瞞他不得なり。海枯不到露底を参学すべし、莫打破、莫動著なり。しかありといへども、さらに参学すべし、拈像鋳鏡の道理あり。当恁麼時は、百千万の鑑照にて、瞞々点々なり」（二・一九頁）と解釈する。「瞞他不得」一語について、『正法眼蔵』「三十七品菩提分法」巻、「観受是苦といふは、苦これ受なり。自受にあらず他受にあらず、有受にあらず無受にあらず。生身受なり、生身苦なり。甜熟瓜を苦葫蘆に換却するをいふ。これ皮肉骨髄ににがきなり。有心無心等ににがきなり。これ一上の神通修証なり。徹帯より跳出し、連根より跳出する神通なり。このゆゑに、将謂衆生苦、更有苦衆生なり。衆生は自にあらず、衆生は他にあらず。更有苦衆生、つひに瞞他不得なり。甜瓜徹帯甜、苦瓠連根苦なりといへども、苦これたやすく摸索著すべきにあらず。自己に問著すべし、作麼生是苦」（三・二七七頁）。「大修行」巻、「しかあるに、古来いはく、不落因果は撥無因果

に相似の道なるがゆゑに墜堕すといふ。この道、その宗旨なし、くらき人のいふところなり。たとひ先百丈ちなみありて不落因果と道取すとも、大修行の瞞他不得なるあり、撥無因果なるべからず」（三・三七五頁）。

〔一七〕（117）瑫禅師古鏡話

僧①問金華：「古②鏡未磨時如何？」師曰：「古③鏡。」僧曰：「磨後如何？」師曰：「古鏡。」

〈書き下し〉

僧金華ニ問フ、「古鏡未ダ磨カ（右・磨ガ）ざル時如何。」師曰く、「古鏡。」僧曰く、「磨ギテ（磨ヒテ）後如何。」師曰く、「古鏡。」

〈出典〉

（A）『景徳伝灯録』巻二一（四二二頁a）

〈現代語訳〉

僧が金華瑫に問うた、「古鏡がまだ磨かれていない時はどうですか。」金華、「古鏡だ。」僧、「磨いた後はどうですか。」金華、「古鏡だ。」

〈注〉

①僧問金華＝諸本は「婺州金華山国泰院瑫禅師〈嗣玄沙〉因僧問」に作る。金華は、玄沙師備の法嗣・国泰瑫（生没年未詳）のこと、『伝灯録』巻二一・『会要』巻二六・『会元』巻八に問答数則を載せるが、行実は未詳。

②古鏡未磨時如何＝「古鏡未磨時如何」「磨後如何」と問う問答は、『伝灯録』にこの他三則見え（巻一七・彭州天台章・三四七頁b、巻二三・含珠真章・四七四頁a、巻二四・龍済紹修章・四八六頁a）、他にも多数用例が存する。

③古鏡＝磨こうが磨くまいが古鏡（本来性）は古鏡である。本来性の実質は修・未修、悟・未悟に関わらないという立場。ほかに、未磨の時には霊妙な輝きが具わり、磨後にはその光は失われてしまう、とする問答も少なくない。たとえば、龍済紹修の問答は次の如し。「問う、古鏡未だ磨かざる時は如何。師曰く、天地を照破す。曰く、磨きし後は如何。師曰く、黒きこと漆の似し」（『景徳伝灯録』巻二四・四八六頁a）。

《補注》

本則は「古鏡」巻にのみ引かれ、拈提されている。因みに「古鏡」巻の瑫禅師は、玄沙にも参じた雪峰下の安国弘瑫との混同が見られる。

婺州金華山国泰院弘瑫禅師、ちなみに僧とふ、「古鏡未磨時如何」。師云、「古鏡」。僧云、「磨後如何」。師云、「古鏡」。しるべし、いまいふ古鏡は、磨時あり、未磨時あり、磨後あれども、一面に古鏡なり。しかあれば、磨時は古鏡の全古鏡を磨するなり。古鏡にあらざる水銀等を和して磨するにあらず。磨自、自磨にあらざれども、磨古鏡なり。未磨時は古鏡くらきにあらず。くろしと道取すれども、くらきにあらざるべし、活古鏡なり。おほよそ鏡を磨して鏡となす、塼を磨して鏡となす。塼を磨して塼となす、鏡を磨して塼となす。磨してなさざるあり、なることあれども磨することえざるあり。おなじく仏祖の家業なり。（二一・四〇頁）

道元の古鏡に関する論考には、石井清純「道元禅師における「古鏡」について」（『三論教学と仏教諸思想』春秋社二〇〇〇年）、同「「古鏡」と「磨塼」に関する一考察」（『宗学研究』四二号・二〇〇〇年）等参照。

〔一八〕（118）仰山問一答十

大潙問仰山①：「承聞子在百丈②問③一答十，是否？」仰云：「不④敢。」師云：「仏⑤法向上道取一句，作麼生道？」仰擬開口，師便喝。師如是三問，仰如是三擬答，凡被喝。仰低頭垂涙云：「先師道，教我更遇⑦人始得。今日便是遇人也。」便発心，看⑧牛三年。一⑨日師入山見，在樹下坐禅。師以杖点背一下。仰廻首。師云：「寂子道得也未？」仰云：「雖道不得，且⑩不就人別借口。」師云：「寂⑪子会也！」

〈書き下し〉

大潙、仰山ニ問フ、「承聞スラクハ（承聞ス）子百丈ニ在テ（右・シニ）、問一答十ス是ナリヤ（是ヤ）否。」仰云く、「不敢。」師云く、「仏法向上ニ道取セム一句、作麼生道。」仰、口を開カムト擬スルニ、師便チ喝ス。師、是ノ如ク三ビ答エムト擬ス（擬答スルニ）、凡ソ喝セ被ル（喝ヲ被ル）。仰、低頭垂涙シテ云く、「先師道ク、我ヲ教テ更ニ人に遇ハバ始得ナラバ、今日（今日ゾ）便チ是レ遇人也（人ニ遇ヘリ〈也〉）。」便ち発心シテ牛ヲ看フコト（看牛ス）三年スルニ、一日、師、山ニ入テ見ルニ、樹下ニ在テ坐禅ス。師、杖ヲ以テ点背一下ス。仰廻首ス。師云く、「寂子道得ナリ也未ヤ。」仰云

く、「道不得ナリト雖ドモ、且タ人ニ就テ別ニ口ヲ借ラ不。」師云く、「寂子会也（会セリ〈也〉）。」

〈現代語訳〉

大潙が仰山に問うた。「聞くところでは、そなた百丈の会下で、一を問われれば十を答えていたそうだが、そうか。」仰山「いえ、それほどでも。」大潙、「仏法の上に言う一句、それをどのように言うか。」そこで仰山が口を開こうとすると、大潙はすかさず一喝した。大潙は同じように三たび問い、仰山は同じように三たび答えようとしたが、すべて一喝された。仰山は頭をたれ、涙を流して言った。「先師は、私を更に然るべき人に出あわせねばならぬと仰せられましたが、今日まさにその方にめぐり遇えました。」かくてただちに発心し、修行して三年が経った。ある日、師が山に入って、見たところ、（仰山は）樹の下で坐禅をしていた。大潙は杖でその背中をちょんとつついた。仰山は振り返った。大潙「慧寂よ、言えるようになったか。」仰山「言えはしませんが、ともかく人さまから言葉を借りることは到しませぬ。」大潙「慧寂は、会得した！」

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻四（八七頁b）

（B）『聯灯会要』巻八（続蔵一三六・二八〇頁a）

〈注〉

①大潙＝潙山霊祐のこと。百丈の法嗣。一〇三則・一一〇則・一一五則に既出。

②仰山＝仰山慧寂のこと。潙山の法嗣。一〇三則・一一〇則・一一五則に既出。後注④に引くように、この則はのちに香厳智閑（同じく潙山に嗣ぐ）の因縁とされるようになる。『聯灯会要』にはなお仰山と香厳の双方に同様の記述が見られるが、後の『五灯会元』や『潙山録』等では香厳の方のみを存している。

③百丈＝おそらく百丈惟政（百丈懐海の法嗣、生没年未詳）のこと。百丈懐海（七四九～八一四）は仰山の生没年（八〇七～八八三）から推して考えにくい。仰山は潙山に参ずる前、耽源応真（嗣南陽慧忠）や石霜性空（嗣百丈懐海）に参じたと伝えられるが（『碧巌録』一八則・本則評唱、上・二四五頁）、百丈に参じたという記録はこれ以前には見出されない。

④問一答十＝一つの問いに対してすぐさま十の答を以って応ずるように、明敏かつ能弁なさま。大慧『正法眼蔵』巻中では、この則を香厳の因縁としつつ次のように記す。「香厳和尚、百丈の会裏に在り。性識聡敏なるも、参禅し得ず。百丈遷化の

後、潙山に到る。山問う、我聞く、汝百丈先師の処に在るに、一を問わば十を答え、十を問わば百を答う、と」（六一頁a）。また『碧巌録』二七則・垂示、「一を問えば十を答え、一を挙すれば三を明らめ、兎を見ては鷹を放ち、風に因って火を吹く」（上・三四〇頁）。

⑤不敢＝おそれいります。めっそうもございません。「不敢当」に同じ。ただし、禅籍では、相手からの称賛に謙遜しつつ、実は自負心を示している場合が多い。『景徳伝灯録』巻八・亮座主章、「因みに馬祖に参ずるに祖問うて曰く、見説ならく座主大いに経論を講じ得ると、是なり否。亮云く、不敢」（一一三頁b）。『正法眼蔵』「仏性」巻に次のようにある。「黄蘗いはく、〝不敢〟。この言は、宋土に、おのれにある能を問取せらるゝには、能を能といはんとても、不敢といふなり。しかあれば、不敢の道は不敢にあらず。この道得はこの道取なること、はかるべきにあらず。長老見処たとひ長老なりとも、長老見処たとひ黄蘗なりとも、道取するには〝不敢〟なるべし」（一・一一四頁）。

⑥仏法向上＝原文は本来「仏法向上に一句を道取せんには」と訓むべきもの。「向上」は単に「上」の意で、上に向うことではない（入矢義高「雲門の禅・その〈向上〉ということ」、『自己と超越』岩波書店一九八六年参照）。潙山の言は仏法を乗り越えたその一句を言えということだが、底本がこれをどう解釈しているかは不明。

⑦遇人＝しかるべき人に出あう。つまり正師に見えること。一八八則、「師云く、遇人ノトキハ（人ニ遇ヘバ）則ち途中ニ受用ス。不遇ナルトキハ則ち世諦流布ス」。

⑧看牛＝看は平声で、見守る、番をするの意。したがって「看牛」は訓点のとおり牛飼いをすることだが、ここはおそらく禅定に沈潜する喩え。『仏垂般涅槃略説教誡経』、「汝等比丘、已に能く戒に住し、当に五根を制して、放逸に五欲に入らしむること勿かるべし。譬えば牧牛の人の杖を執りて之を視り、縦逸に人の苗稼を犯さしめざるが如し」（大正一二・一一一頁a）。『景徳伝灯録』巻九・福州大安章、「百丈曰く、牧牛の人の、杖を執って之を視り、人の苗稼を犯さしめざるが如し」（一三九頁b）。

⑨一日師入山見、在樹下坐禅＝底本は訓読に合わせて「一日師入山見、在樹下坐禅」と断句しているが、本来は「見」の上で切るほうがよい。

⑩且不就人別借口＝人の言葉に依拠してあれこれ言うことはしない。「問一答十」であった仰山が、血肉化されていない借り

物の知識は無意味であると表明した語。まだ道得は出来ないが、とりあえず既成の言語を借りて言うつもりはない、という意。ただしその裏に、言語化するか否かは別として、ともかく言語以前のところ―潙山が三たびの「喝」で示したところ―それだけは会得した、という含みをもつかも知れない。

⑪寂子会也＝仰山が言葉を超えた仏向上の事を体認した、と認めた。「会也」は一〇五則注⑦参照。文末の「也」は文語の「ナリ」ではなく、事柄の変化や完成を示す口語の用法。～になる、～になった、～した。太田辰夫『中国語史通考』八七頁（白帝社一九八八年）参照。

《補注》

本則は、『正法眼蔵』「行持下」巻で次のように引かれる。

のちに仰山きたり侍奉す。仰山、もとは百丈先師のところにして、問十答百の鶩子なりといへども、潙山に参侍して、さらに看牛三年の功夫となる。近来は断絶し、見聞することなき行持なり。三年の看牛、よく道得を人にもとめざらしむ。（一・三七九頁／安良岡康作訳注『正法眼蔵・行持（下）』講談社学術文庫二〇〇二年・二七九頁）

〔十九〕（119）趙州庭前柏樹

僧問趙州①：「如②何是祖師西来意？」州云：「庭前柏③樹子。」僧曰：「和尚莫④以境示人。」州云：「吾⑤不以境示人。」僧云：「如何是祖師西来意？」州云：「庭前柏樹子。」

〈書き下し〉

僧、趙州ニ問ふ、「如何か是レ祖師西来意」。州云く、「庭前ノ柏樹子」。僧曰く、「和尚、境ヲ以テ人ニ示スコト莫レ」。州云く、「吾レ境ヲ以テ人ニ示サ不ズ」。僧云く、「如何か是レ祖師西来意」。州云く、「庭前の柏樹子」。

〈現代語訳〉

僧が趙州に質問した、「祖師達磨が中国に来られた意味とは如何なるものでしょう」。趙州、「庭さきの柏樹」。僧、「和尚、目の前の物で示すのはおやめ下さい」。趙州、「わしは目の前の物でなど示しておらぬ」。僧、「しからば、祖師達磨が中国に来られた意味とは如何なるものでしょう」。趙州、「庭さきの柏樹」。

〈出典〉

（A）『大慧録』巻八（大正四七・八四四頁a）

『聯灯会要』巻一四（続蔵一三六・三三三頁d）

（B）『禅門拈頌集』巻一一（一九二頁a）

『宗門統要集』巻四（七七頁b）

『聯灯会要』巻六（続蔵一三六・二六四頁c）

『趙州録』（三五頁）

＊全体に文字の異同はわずかだが、最初を「僧問趙州」に作る点、及び趙州の語を「師云」とせず、「州云」と記す点の二点で『大慧録』と『聯灯会要』雲居元祐章のみが底本と一致する。

〈注〉

①趙州＝趙州従諗。一一四則に既出。この問答はほかにも『碧巌録』四五則・本則評唱や『無門関』三七則等、多くの書物にとりあげられている。

②如何是祖師西来意＝祖師達磨が中国に来た意味、つまり達磨によって伝えられた禅の第一義とはいかなるものか。「如何是」は、一二二則に「如何カ是レ学人ノ自己」、一四三則には「如何是レ仏法ノ大意」等とあるが、振り仮名が無いため、どう訓まれたかは未詳。仮字『正法眼蔵』には「いかなるかこれ」「いかにあらんかこれ」の訓みが見える。「仏性」巻、「いまの人も、仏性ときゝぬれば、いかなるかこれ仏性と問取せず、仏性の有無等の義をいふがごとし、これ倉卒なり」（一・八九頁）。「道得」巻、「かくて日往月来するほどに、家風ひそかに漏泄せりけるによりて、あるとき僧きたりて庵主にとふ、いかにあらんかこれ祖師西来意」（二・二八八頁）。

③柏樹子＝「柏樹」は邦語でいう落葉樹の「カシワ」ではなく、常緑樹の「コノテガシワ」「ヒノキ」の類。「子」は接尾辞で、実義無し。一〇五則の「枕子（シンス）」や一一四則の「狗子（クス）」などに同じ。

④莫以境示人＝「境」は認識の対象となる外在の事物、ここはそれをただちに「西来意」と等置されては困るという意。なお、「以」字は前掲出典群ではすべて「将」に作るが、『正法眼蔵』『永平広録』ではそれを底本と同じく一律に「以」字に作る。

三書が同系統であることの証左の一つと言ってよい。

⑤吾不以境示人＝わしは対境を示したのではない、それを見るお前自身の心をこそ直指したのだ。『趙州録』に本則とは別に次の問答があるのを参照。「問う、如何なるか是れ学人の自己。師云く、還た庭前の柏樹子を見る麼」（六一頁）。また『景徳伝灯録』巻一一・仰山慧寂章の次の問答も同様の意に解しうる。「師、僧の来たるを見て、払子を竪起す。其の僧便ち喝す。師曰く、喝は即ち無きにあらず。且く道え、老僧、過、什麼処に在りや。僧曰く、和尚、境を将って人に示す合らず。師乃ち之を打つ。」（一七四頁a／禅文化研究所訓注本第四冊・一八九頁）。

《補注①》

本則は『正法眼蔵』「柏樹子」巻に引かれるほか、『永平広録』巻六・上堂四三三、巻七・上堂四八八、巻八・小参九、巻九・頌古四五にも引用されている。ちなみに、「柏樹子」巻の本則に対する解は次のようである。

この一則公案は、趙州より起首せりといへども、必竟じて諸仏の渾身に作家しきたれるところなり。たれかこれ主人公なり。いましるべき道理は、庭前栢樹子、これ境にあらざる宗旨なり。栢樹子、これ自己にあらざる宗旨なり。和尚莫以境示人なるがゆゑに。吾不以境示人なるがゆゑに。いづれの和尚か和尚にさへられん。さへられずは、吾なるべし。いづれの吾か吾にさへられん。たとひさへらるとも、人なるべし。いづれの境か西来意に罣礙せられざらん。境はかならず西来意なるべきがゆゑに。しかあれども、西来意の境をもちて相待せるにあらず。祖師西来意かならずしも正法眼蔵涅槃妙心にあらざるなり。不是心なり、不是仏なり、不是物なり。いま、如何是祖師西来意と道取せるは、問取のみにあらず、両人同得見のみにあらざるなり。正当恁麼問時は、一人也未可相見なり、自己也能得幾なり。さらに道取するに、渠無不是なり。このゆゑに錯々なり、錯々なるがゆゑに将錯就錯なり。承虚接響にあらざらんや。豁達霊根無向背なるがゆゑに、庭前栢樹子なり。境にあらざれば栢樹子にあるべからず。たとひ境なりとも、吾不以境示人なり、和尚莫以境示人なり。古祠にあらず。すでに古祠にあらざれば埋没しもてゆくなり。すでに埋没しもてゆくことあるは、還吾功夫来なり。還吾功夫来なるがゆゑに吾不以境示人なり。さらになにをもてか示人する、吾亦如是なるべし。（二・三九九頁）

《補注②》

この則の解釈は衣川賢次「古典の世界―禅の語録を読む（2）」（月刊『中国語』一九九二年一二月号・内山書店）に多くを負う。併せて参照ありたい。

〔二〇〕（120）**進山主生不生**

進①山主，問修②山主云：「明知生③不生性，為什麼為生之所留？」修云：「筍④畢竟成竹。如今作篋⑤使，還得麼？」進云：「汝⑥向後自悟在！」修云：「某甲只如此，上座意旨如何？」進云：「遮⑦箇是監院房，那箇是典座房。」修便礼拝。

〈書き下し〉

進山主、修山主ニ問テ云ク、「明カニ生不生ノ性ヲ知ル、什麼ト為テカ生之為メニ留メ所ルル。」修云く、「筍畢竟ニ（畢竟ジテ）竹ト成ル（成レドモ）。如今篋ニ（篋ニ）作テ使フコト（使ハンニ）、還タ得ン麼（得麼）。」進云く、「汝向後ニ自ラ悟ルコト在ラム。」修云く、「某甲シ只ダ此ノ如シ、上座（上座）意旨如何。」進云く、「遮箇是（是レ）監院房、那箇是（是レ）典座房。」修便ハチ礼拝ス。

〈現代語訳〉

進山主が修山主に質問した、「生にして不生という理を明らかに知っておりながら、どうして生死に繋縛されてしまうのか。」修山主、「筍はしまいには竹になる、それを今竹皮にして使う、それで良いですか。」進山主、「お主もいずれ悟るときがあろう。」修山主、「私の理解はこれ以上に出ません。貴公のお考えはどうなのです。」進山主、「これは監院寮、あれは典座寮。」修山主はそこでただちに礼拝した。

〈出典〉

（A）『宏智録』巻二・頌古七〇（一〇八頁a）

（B）『景徳伝灯録』巻二四（四八三頁b）

『聯灯会要』巻二六（続蔵一三六・四三九頁d）

参考『従容録』七〇則・進山問性

〈注〉

①進山主＝清渓洪進（生没年未詳）のこと。羅漢桂琛のもとで第一座を務め、その法を嗣いだ。「進山主」とは後に清渓山の住持となったことに因む呼称。『伝灯録』巻二六・円通縁徳章「江表に尋ね往き、道を問い、洪進山主に値いて心を印せらる」

（五三二頁a）参照。

②修山主＝龍済紹修（生没年未詳）のこと。羅漢桂琛の法嗣。「修山主」は後に龍済山の住持となったことによる呼称。『伝灯録』巻二四に「撫州龍済山主紹修禅師」として立伝される。出典群（B）の『伝灯録』や『聯灯会要』の清渓洪進章では、本則の直前に次の話を載す。「襄州清溪山洪進禅師、地蔵に在りし時、第一坐に居る。一日、二僧有りて礼拝す。地蔵和尚曰く、倶に錯まれり。二僧語無し。堂を下りて修山主に請益す。修曰く、汝ら自ら巍巍堂堂たるに、却て礼拝して他人に問わんと擬す、豈に是れ錯りにあらざるや。師、之れを聞いて肯わず。修乃ち問いて曰く、未審し上座は作麼生。師曰く、汝自ら暗に迷えるに、焉ぞ人の為にすべけんや。修、憤然として法堂に上り、地蔵に請益す。地蔵、廊下を指して曰く、典座、庫頭に入り去れり也。修乃ち過を省す」（『伝灯録』四八三頁b）。

③生不生性＝生（有）が滅してはじめて不生（空）となるのではなく、生が生のままで不生であるということ。『従容録』七〇則・本則評唱は、『仏説長者女庵提遮師子吼了義経』の次の一段を引く。「爾の時、文殊師利又た問うて曰く、頗た明らかに生は而も不生の相なりと知りて、生の為に留め所るる者有り不。答えて曰く、有り。自ら明らかに見ると雖も、其の力未だ充ず、而して生の為に留め所るる者是れなり也」（大正一四・九六四頁a）。同経は『宗鏡録』巻三（大正四八・四二九頁a）にも引かれている。

④筍＝竹の子のこと。「タカンナ」は「たかむな」の転訛、「笋」とも書く。『和名類聚抄』巻二〇、「笋　尒雅注に云く、筍。〈音隼。字亦笋に作る、和名は太加尤奈〉竹の初生也。本草に云ふ、竹笋、味甘平にして毒無し。焼きて之を服す」（原装影印版『倭名類聚抄〔二〇巻本〕』雄松堂書店一九七三年・第一〇冊六六丁表）。『平家物語』巻三・公卿揃「余に人まいりつどひて、たかんなをこみ、稲麻竹葦のごとし」（日本古典文学大系三二『平家物語・上』岩波書店一九八〇年・二二一頁）。

⑤篋＝竹の子である時には未だ竹は存在しない。竹になった時にはもはや竹の子は存在せず、篋（竹の皮）も未だ存在しない。そして、それが篋として用いられる時には、竹の子も竹もすでに存在しない。そのように竹の子も竹も篋も、いずれも空にして無常なるものでありながら、その間に確たる連続性がある。それが生にして不生ということだ、というのであろう。篋は竹の皮のこと。『従容録』七〇則・本則評唱、「篋は竹皮、物を束る竹索なり也」（一一八頁a）。『玄沙広録』巻中、「師篋を将ち拈じて僧に問う、者箇の竹は是れ我が栽種せるものにして、是れ我が斫劈せる篋なり、如今将に地蔵に与えん、汝且く作麼生。

元安云く、好き箋なり。師云く、是れ者箇の道理にあらず。師代りて云く、也た東使西使せんと要す。地蔵云く、箍桶を得」（禅文化研究所一九八八年・九〇頁）。「ネリソ（練り麻）」は、繊維質の木や藤などの植物を縄代わりにしたもので、薪などを束ねるのに用いた。歌語。『大納言経信集』「牆根梅花」「梅が枝はねりそもて結ふ垣根にもあはれやつれず匂ふなりけり」（岩波古典文学大系八〇『平安鎌倉私家集』岩波書店一九六四年・一八五頁）参照。

⑥汝向後自悟在＝将来きっと悟る時があるだろう。つまり、今の一語ではまだ悟りにはほど遠い、ということ。

⑦遮箇是監院房、那箇是典座房＝監院房は監院寮のこと、一山の運営を総括する部署。典座房は食事を司る寮舎。『禅林象器箋』第七類・職位門の「監院」「典座」の各条参照。今、現にそれぞれの務めを果たしながら、この寺で修行している、その一瞬一瞬の在り方がそのまま生にして不生であるのだ、という意か。修山主の見解は「生不生」を論理的に説明しているだけで、現在する自己と何の関係もない。その点を突いた語と解しておく。なお『従容録』で万松は、この語は注②で引いた地蔵の語「典座、庫頭に入り去れり也」と同意であるとしている（「此れ典座、庫下に入り去れり也と更に両様無し」一一八頁a）。

《補注》

本則は、『永平広録』巻一・上堂一〇一に引かれ、最後に道元の一転語が付される。

上堂、拳す、進山主、修山主ニ問テ云ク、明ニ知ル生不生ノ性、什麼ト為カ生ノ為ニ留所ルル。修云ク、筍畢竟ジテ竹ト成ル。如今箋ニ作リテ使ハンニ還タ得テン麼。進云ク、汝ヂ向後ニ自悟スルコト在ン。修云ク、某甲只だ此ノ如し。上座意旨如何。進云ク、這箇是監院房、那箇是典座房。修便ち礼拝す。師、良久シテ云ク、公案現成ス三四尺。籮籠新ニ結ブ五千年。（一・一〇八頁）

〔二一〕（121）麻谷鋤頭鋤草

寿州良遂座主①、初参麻浴②。谷見来、便将鋤頭去鋤草。師到鋤草処。谷殊③不顧。便帰方丈、閉却門。師次日復去。谷又閉関。師遂敲門。谷乃問：「阿誰？」師④曰：「良遂。」纔称名字、忽尓契悟。乃云：「和尚莫瞞⑤良遂。良遂若不来礼拝和尚、洎⑥合被経論賺過一生。」及帰講肆⑦、開演有云：「諸⑧人知処、良遂総知。良遂知処、諸人不知。」終罷講徒散。

〈書き下し〉

寿州良遂座主、初めテ麻浴ニ参ズ。谷来ルヲ見テ便チ鋤頭ヲ将テ去イテ、草ヲ鋤ク。師草ヲ鋤ク処ニ到ル。谷殊サラ顧リミ不。

便チ方丈ニ帰リテ門ヲ閉却ヅ。師次ノ日復タ去ク。谷又関ヲ閉ヅ（閉関ス）。師遂ニ門ヲ敲ク。谷乃チ問フ、「阿誰ト（阿誰）。」師曰ク、「良遂。」纔ニ名字ヲ称スルニ、忽尓ニ（忽尓トシテ）契悟ス。乃ち云ク、「和尚、良遂ヲ瞞ズルコト莫レ。良遂若シ来りテ和尚ヲ礼拝セ不バ、洎ド経論ニ一生ヲ賺過セ被レナマシ（被ル）合シ。」講肆ニ帰ルニ及びテ開演シテ云ヘルコト有リ、「諸人ノ知処、良遂総知ス（総ジテ知ル）。良遂ガ知処、諸人知ら不るナリ。」終ニ講ヲ罷メ徒ヲ散ズ。

〈現代語訳〉

寿州の良遂座主が、初めて麻谷に参じたときのこと。麻谷は（良遂が）やって来るのを見ると、そのまま鋤を持って、草刈りに出かけてしまった。良遂は草を刈っているところまで行ったが、麻谷はわざと振り返らず、すぐさま方丈に帰って門を閉ざした。良遂は翌日再び出向いて行った。麻谷はまたしても門を閉ざした。良遂はそこで門を敲く。麻谷は問う、「誰だ。」良遂「良遂です。」そう名を言うや、はたと悟った。そしてこう言った、「和尚さま、私に隠しだてはお止め下さい。もしやって来て和尚さまを礼拝していなければ、あやうく経論にだまされて一生を終えるところでした。」

講座に帰ると講義を開いてこう言った、「そなたらの知っているところを、私は総て知っている。だが私が知っているところを、そなたらは知らぬ。」そして、終に講座をやめ、門下を解散させたのであった。

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻四（八二頁b）

（B）大慧『正法眼蔵』巻下（一〇七頁b）

『聯灯会要』巻七（続蔵一三六・二七八頁c）

〈注〉

①寿州良遂座主＝麻谷の法嗣。『景徳伝灯録』巻九、『聯灯会要』巻七等に見ゆ。「座主」は経論を講じる学僧。

②麻浴（谷）＝蒲州麻谷山に住した麻谷宝徹のこと。馬祖道一の法嗣。『祖堂集』巻一五、『景徳伝灯録』巻七、『聯灯会要』巻四等に見ゆ。一二三則も麻浴に作る。

③殊不＝「殊」は否定の強め。『永平広録』巻三・上堂一九六、「殊ニ知ラ不、国師、三蔵ノ眼睛裏ニ在ルコトヲ」（上・二四八頁）。

④師曰良遂…契悟＝「纔～」は～するやいなやただちに、の意。一〇四則注④に既出。「忽尓」は、突然、突如の意。『正法眼蔵』「行仏威儀」巻、「この宗旨あらはるゝ、古今の時にあらずといへども行仏の威儀忽爾として行尽するなり」（一・一六六頁）。自らの名をあらためて確認することによって、自分が正に自分であるという端的な事実こそがすべてだと悟った。『永平広録』巻九・頌古八四、「恵超、法眼ニ問フ、如何カ是レ仏。眼云ク、汝ヂハ是レ恵超」（下・三五四頁／『三百則』二五二則）。『玄沙広録』巻上、「問う、如何なるか是れ本来物。師（玄沙）云く、你は豈に陳安児に不是や」（禅文化研究所訳注本・上・一六四頁）。「問う、如何なるか是れ学人本生の父母。師云く、我はこれ釣魚の謝三郎」（同九六頁／玄沙の俗姓は謝、出家前は漁夫であった）。

⑤瞞＝真実を隠してだます意。一一六則に既出。

⑥洎合…一生＝「洎合」は二字で、あやうく、すんでのところで、の意。「洎」、「幾合」、「幾乎」に同じ。『祖堂集』巻一四・馬祖道一章、「今日若し和尚に遇わざれば、洎合ど空しく一生を過ごさんとす」（禅文化研究所基本典籍叢刊本・五二四頁）。ただしここでは「合」をべしと訓んでいる。また「ホトヲト」という訓みは『色葉字類抄』前田本四六ウ（財団法人前田育徳会尊経閣文庫編・尊経閣善本影印集成一八『色葉字類抄一〈三巻本〉』八木書店二〇〇〇年・九八頁）、黒川本三七オ（中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引〈黒川本・影印篇〉』風間書房一九七七年・八七頁）や『塵袋』巻一〇・一八ウ（山崎誠編『印融自筆本重要文化財・塵袋とその研究』上・勉誠社一九九九年・七一四頁）などに見える。「嫌」はだます、すかすの意。『碧巌録』九則・本則評唱、「後人喚んで無事禅と作すは人を嫌すること少なからず」（上・一四五頁）。良遂の語は、あやうく経論に心を奪われて、自己の本分事を見のがしたまま、無駄に一生を過ごしてしまうところだったという意。

⑦講肆＝経論を講義をする講座のこと。『景徳伝灯録』巻八・南泉普願章、「次いで諸々の講肆に遊び、楞伽と華厳を歴聴す」（一一七頁a）。

⑧開演＝講説によって、意味を開示し敷衍すること。『永平広録』巻六・上堂四三五、「夫レ、正法眼蔵ヲ開演セント欲スルニ、第一義門有り、第二義門有リ」（下・三八頁）。

⑨諸人…不知＝前半は、本来の面目を悟ったことによって、経論の知識やその解釈にとどまらない絶対的な智を体得したということ。後半は、自分が自分であるという端的な事実は、各自が我が身に徹して知るほかなく、他者とは共有不可能だということ。

⑩終罷講徒散＝この一文は前掲の出典群のいずれにも見えない。原文「徒散」は「散徒」とあるべきもので、一〇四則に「遂罷講散徒」と見える。本則については底本及び成高寺本では「徒散」、真法寺本では「散徒」に作る。底本の訓点は「散徒」に対する訓みを示している。

《補注》

本則は『正法眼蔵随聞記』巻一に次のように引かれる。

学道の人、若し悟を得ても、今は至極と思ウて行道を罷ル事なかれ。道は無窮なり。さとりてもなほ行道すべし。良遂座主、麻谷に参ぜし因縁を思うべし。（三二頁a）

初期道元門下の人々が、この短い一節からただちに本則を想起し得たということは、当時の会下に共通のテキスト（＝『三百則』）が存在したことを推測させる。詳しくは石井修道「真字『正法眼蔵』の歴史的性格」（『宗学研究』一二号・一九七〇年）参照。

〔二二〕（122）玄則丙丁童子

玄則①禅師，在法②眼会中，一日眼云：「你在此③間多少時耶？」師云：「在和尚会，已④得三年。」眼云：「你⑤是後生，尋常何不問事？」師云：「某甲不敢瞞和尚。某甲曾在青⑥峰処，得箇⑦安楽。」眼云：「你因甚語得入？」師云：「曾問青峰，如何是学人自己？峰云，丙⑧丁童子来求火。」眼云：「好語！祇恐你不会。」師曰：「丙丁属火，将⑨火求火。似将自己覓自己。」眼云：「情⑩知你不会。仏法若如是，不到今日。」師乃操⑪悶便起。至中路却云：「他是五百人善知識。道我不是，必有長⑫処。」却回懺悔便問：「如何是学人自己？」眼云：「丙丁童子来求火。」師⑬言下大悟。

〈書き下し〉

玄則禅師、法眼ノ会ノ中ニ在リシニ、一日眼云ク、「你ヂ此間ニ在リテ多少ノ時耶。」師云ク、「和尚ノ会ニ在リテ、已得ニ三年。」眼云ク、「你ヂ是レ後生ナリ（後生ナリ）、尋常ニ何ゾ問事不ル。」師云ク、「某甲シ不敢瞞和尚。某甲シ曾テ青（青）峰ノ処ニ在リシニ、箇安楽ヲ得タリ。」眼云ク、「你ヂ甚語ニ因テカ入ルコトヲ得シ。」師云ク、「曾テ青峰ニ問フ、如何カ是レ学人ノ自己。峰云ク、丙丁童子来テ火ヲ求ム。」眼云ク、「好語、祇シ（祇）恐クハ你ヂ会セ不ラムコトヲ（不会ナラムコトヲ）。」師曰ク、「丙丁（丙丁）火ニ属ス。火ヲ将テ火ヲ求むル。自己ヲ将テ自己ヲ覓ムルニ似タリ。」眼云ク、「情ニ知ヌ、你

ヂ不会ナルコトヲ。仏法若シ是ノ如くナラバ、今日ニ到ラ不。」師乃チ操悶シテ便ち起チヌ。中路ニ至ルニ却ニ（却テ）云フ、「他ハ是レ五百人ノ善知識ナリ。我ガ不是ヲ道フ、必ズ長処有ラム。」却回テ（却タ回テ）懺悔シテ便チ問フ、「如何是レ学人ノ自己。」眼云く、「丙丁童子来求火。」師、言下ニ（言ノ下ニ）大悟ス。

〈現代語訳〉

玄則禅師は、法眼文益の会中にいた。ある日、法眼が云った。「そなたは此処にいてどれくらいになるか。」玄則、「和尚さまの法会にあって、すでに三年になります。」法眼、「そなたは若僧のくせに、日頃どうして何も問わぬ。」玄則、「和尚さまには、とても隠しだてなどできません。わたくしはかつて青峰禅師の処にて、安楽のところを得たのです。」法眼、「お前はどのような語によって手がかりを得たのか。」玄則、「かつて青峰禅師にお尋ねしました。如何なるか是れ学人の自己。すると、青峰禅師はおっしゃいました、丙丁童子来りて火を求む。」法眼、「好い語だ！　ただ恐らく、そなたは理解しておるまい。」玄則、「丙丁は火に属します。ですから、火をもって火を求める意です。それは自己をもって自己を覓めるようなものだということです。」法眼、「しかとわかった、そなたが理解しておらぬのが。仏法がもしそのようなものであったなら、今日まで伝わってはいなかったろう。」玄則はここに至っていらだち、ただちに旅に出てしまった。だが、道半ばに至ってこう思った。「かれは五百人の導師である。わたしを誤りと言う以上、必ずや取るべき点があるはずだ。」そこで戻って懺悔するなり問うた。「如何なるか是れ学人の自己。」法眼「丙丁童子来りて火を求む。」玄則はその言下に大悟した。

〈出典〉

（A）『宏智録』巻一・上堂一八（一一頁）

（B）大慧『正法眼蔵』巻下（一〇五頁b）

『聯灯会要』巻二七（続蔵一三六・四四五頁b）

『禅門諸祖師偈頌』巻二（続蔵一一六・四六四頁d）

〈注〉

①玄則＝金陵報恩院玄則（生没年不詳）のこと。法眼文益の法嗣。『景徳伝灯録』巻二五に語を録し、本則のもとの話もそこに見える。また、「玄則丙丁童子」として公案に用いられ、『碧巌録』七則「法眼答慧超」の本則評唱にも引かれる。

②法眼＝文益（八八五～九五八）のこと。一一一則に既出。
③此間＝「此間」は「此中」と同じく、二字で「ここ」の意。一二七則では「スカン」と訓む。
④已得三年＝既に三年経ったの意。門鶴本『永平広録』に引く本則でもここを「已ニ三年ヲ得タリ」と訓む。しかし、ここは「已経」の場合と同じく「得」を虚字化したものと看て、二字で「已得（スデ）ニ」と訓じている。
⑤你是後生、尋常何不問事＝そなたは若僧のくせに、日頃よりなぜ仏法を問わぬ。「後生」は若者の意。『臨済録』行録、「師、初め黄檗の会下に在って、行業純一なり。首座乃ち歎じて曰く、是れ後生なりと雖も、衆と異なること有り」（一七九頁）。「問事」の「事」は「説話」（ものをいう、くちをきく）の「話」などと同じく、具体的に指す対象をもたず、動詞と目的語が一組となってある行為を表わすもの（同源賓語）。それでここは「問事」の二字で「とふ」と訓んでいる。
⑥青峰＝未詳。大正蔵『景徳伝灯録』（元版）には「有る本に白兆と云う」という双行注があり、宝永本『宏智録』の書き入れでは、それを洪州感譚資国和尚嗣安州白兆山竺乾院志国とする。また、『碧巌録』岩波文庫本の注では石門慧徹嗣青峰義誠とする（上・一二五頁）。青峰山は洛甫元安の嗣、伝楚によって開かれた。
⑦箇安楽＝「箇」は「一箇」の意だが、底本では不読文字の扱い。一一三則注⑨⑩参照。以下同じ。
⑧丙丁童子来求火＝丙丁童子については未詳。十干の丙・丁は五行では火に当る。
⑨将火求火。似将自己覓自己＝「将頭覓頭」「騎牛覓牛」などと言うのと同種の、典型的な無事禅の説。『碧巌録』七則・本則評唱ではこの句を「火を以て火を求む。如えば某甲（それがし）の是れ仏なるに更に去（ゆ）きて仏を覓むるがごとし」（上・一二三頁）に作る。
⑩情知你不会＝お前が理解していないということを、はっきりと知った。「情知…」は明らかに知る意で、唐詩などにも多数の用例があるが、禅録では、今の答えでお前の見解の不可なることがわかったと断ずる言い方によく用いられる。二八二則、「情（まこと）に知りぬ、汝の驢胎馬腹裏に向（お）いて活計を作（な）すを」。二九八則、「情（まこと）に知りぬ、汝の第二頭に向（お）いて道（い）えるを」。
⑪操悶＝『宏智録』では「躁悶」に作る。また『広録』は「懆」に作る。いずれも焦り、苛立つの意。
⑫長処＝勝れた見解のこと。『碧巌録』一〇〇則・垂示、「且（きて）道、為復（はたた）是れ当面して諱却（はばか）るか、為復（はたた）別に長処有るか。試みに挙し看ん」（下・二六五頁）。
⑬師言下大悟＝前回と全く同じやりとりでありながら、なぜ今回は大悟したのか。蓋し前回がただ「本来無事」の境位（○度）

への安住にすぎなかったのに対し、今回は疑団（一八〇度）を突破したうえでの「本来無事」への帰着（三六〇度）となっている。その点が異なっていたのではあるまいか。後出一二四則「深明見人牽網」の話とあわせ看られたい。

《補注》

本則は『弁道話』（一・四二頁）に取り上げられる。なお、本則については、野村瑞峯「金沢文庫本正法眼蔵―第二十二則について―」（『金沢文庫研究』一一七・神奈川県立金沢文庫・昭和四〇年）の論究がある。その中で氏は、『弁道話』と本則との本文比較対照を行い、金沢文庫本が仮字『眼蔵』の台本的性格の位置を占めるものと述べている。対応関係は次の如し。

金沢文庫本『正法眼蔵』	同上書き下し	正法寺本「弁道話」（『蒐書大成』四・六六〇頁a）
玄則禅師、在二法眼会中一、 一日眼云、你在二此間一多少時耶。 師云、在二和尚会一、已得二年。 眼云、你是後生、尋常何不二問事一。 師云、某甲不敢瞞和尚。某甲曾在二青峰処一、得二箇安楽一。 眼云、你因二甚語一得レ入。	玄則禅師、法眼ノ会ノ中ニ在リシニ、 一日眼云ク、「你ヂ此間ニ在リテ多少ノ時耶。」 師云く、「和尚ノ会ニ在リテ、已得ニ三年。」 眼云く、「你ヂ是レ後生ナリ（後生ナリ）、尋常ニ何ゾ問事不ル。」 師云く、「某甲シ不敢瞞和尚。某甲シ曾テ青（青）峰ノ処ニ在リシニ、箇安楽ヲ得タリ。」 眼云く、「你ヂ甚語ニ因テカ入ルコトヲ得シ。」	昔、則禅師ト云、法眼禅師ノ会中ニシテ、監院ヲ司ドル時ニ、 法眼禅師、問テ曰ク、「則監寺、汝我ガ会ニ有テ幾ノ時ゾ。」 則公ガ云、「我レ師ノ会ニ侍テ既ニ三年ヲ歴タリ。」 禅師ノ云ク、「汝ハ後生ナリ、何ゾ常ニ仏法ヲ問ハザル。」 則公曰ク、「某甲和尚ヲ欺クベカラズ。曾テ青峰禅師ノ処ニ有リシ時、仏法ニ置テ安楽ノ処ヲ了達セリ。」 禅師曰ク、「汝イカナル言バニヨリテカ入ルコトヲ得シ。」

師云、曾問二青峰一、如何是学人自己。
峰云、丙丁童子来求レ火。
眼云、好語。祇恐你不　会。
師曰、丙丁属レ火、将レ火求レ火。似下将二自己一覓中自己上。
眼云、情知不会。仏法若如レ是、不レ到二今日一。
師乃操悶便起。至二中路一却云、他是五百人善知識。道二我不是一、必有二長処一。
却回懺悔便問、如何是学人自己。
眼云、丙丁童子来求火。
師言下二大悟一。

師云く、「曾テ青峰ニ問フ、如何カ是レ学人ノ自己。峰云ク、丙丁童子来テ火ヲ求ム。」
眼云く、「好語、祇シ（祇）恐クハ你ヂ会セ不ラムコトヲ（不会ナラムコトヲ）。」
師曰く、「丙丁（丙丁）火ニ属ス。火ヲ将テ火ヲ求むル。自己ヲ将テ自己ヲ覓ムルニ似タリ。」
眼云ク、「情ニ知ヌ、你ヂ不会ナルコトヲ。仏法若シ是ノ如くナラバ、今日ニ到ラ不。」
師乃チ操悶シテ便ち起チヌ。中路ニ至ルニ却ニ（却テ）云フ、「他ハ是レ五百人ノ善知識ナリ。我ガ不是ヲ道フ、必ズ長処有ラム。」
却回テ（却タ回テ）懺悔シテ便チ問フ、「如何是レ学人ノ自己。」
眼云く、「丙丁童子来求火。」
師、言下ニ（言ノ下ニ）大悟ス。

則公ノ云ク、「某甲曾テ青峰ニ問イキ、如何是学人ノ自己。青峰ノ曰ク、丙丁童子来求火。」
禅師ノ曰、「好キ言バナリ。但シ恐ハ汝ヂ得セザランコトヲ。」
則公ガ曰ク、「丙丁ハ火ニ属ス。火ヲ以テ更ニ火ヲ求ム、自己ヲ以テ自己ヲ求ムルニ似タリト会セリ。」
禅師ノ曰、「実ニ知リヌ、汝ヂ不会ケリ。仏法モシ如レ是ナラバケウ迄デニ伝ハラジ。」
此ニ則公、操悶シテ、即チ立チヌ。又中路ニ至リテ思イキ、「禅師ハ是天下ノ知識、又五百人ノ導師ナリ。我ガ非ヲ諫ム、定メテ長処有ラン。」
帰テ懺悔礼謝シテ問テ曰ク、「如何是学人ノ自己ナル。」
禅師ノ曰、「丙丁童子来求火。」
則公、言下ニ大ニ仏法ヲ悟リキ。

「弁道話」（洞雲寺本）

むかし、則公監院といふ僧、法眼禅師の会中にありしに、法眼禅師、とうていはく、「則監寺、なんぢわが会にありていくばくのときぞ。」則公がいはく、「われ師の会にはむべりて、すでに三年をへたり。」禅師のいはく、「なんぢはこれ後生なり、なんぞつねにわれに仏法をとはざる。」則公がいはく、「それがし和尚をあざむくべからず。かつて青峰の禅師のところにありしとき、仏法におきて安楽のところを了達せり。」禅師のいはく、「なんぢいかなることばによりてか、いることをえし。」則公がいはく、「それがしかつて青峰にとひき、いかなるかこれ学人の自己なる。青峰のいはく、丙丁童子来求火。」法眼のいはく、「よきことばなり。たゞし、おそらくはなんぢ会せざらむことを。」則公がいはく、「丙丁は火に属す。火をもてさらに火をもとむ、自己をもて自己をもとむるにたりと会せり。」禅師のいはく、「まことにしりぬ、なんぢ会せざりけり。仏法もしかくのごとくならば、けふまでにつたはれじ。」

こゝに則公、懆悶して、すなはちたちぬ。中路にいたりておもひき、禅師はこれ天下の善知識、又五百人の大導師なり。わが非をいさむる、さだめて長処あらむ。禅師のみもとにかへりて懺悔礼謝してとうていはく、「いかなるかこれ学人の自己なる。」禅師のいはく、「丙丁童子来求火」と。則公、このことばのしたに、おほきに仏法をさとりき。（一・四二頁）

〔二三〕（123）宝徹無処不周

麻①浴山宝徹禅師，一日使扇次，有僧問：「風②性常住，無処不周。和尚為甚却揺扇？」師云：「你只知風性常住，且不知無処不周。」僧云：「作麼生是無処不周底道理？」師却揺扇。僧③作礼。師云：「無④用処⑤師僧，著得一⑥千箇，有什麼益。」

〈書き下し〉

麻浴山宝徹禅師、一日扇ヲ使フ（使扇ノ）次デニ、有ル僧問フ、「風性常住、処トシテ周ラ不る無シ。和尚為甚カ却マタ（右・却ニ）揺扇スル。」師云く、「你ヂ只ダ風性常住ヲ知リテ、且ラク無処不周ヲ知ラ不。」僧云く、「作麼生是レ（是）無処不周底ノ道理。」師却ニ（却タ）揺扇ス。僧礼ヲ作ス（作礼ス）。師云く、「無用処師僧、著得一千箇、有什麼益）。」

〈現代語訳〉

麻谷山宝徹禅師が、一日扇を使っていたところ、ある僧が問うた、「風性は常住で、あらゆる所に遍満しています。なのに和

尚さまはどうしてことさら扇を使われるのですか。」宝徹、「お前はただ風性常住を知るだけで、さしあたり無処不周ということがわかっておらぬ。」僧、「無処不周底の道理とは如何なるものですか。」宝徹は更に扇を使うだけであった。僧は礼拝した。宝徹、「こんな役立たずの修行僧、千人おいたところで、何の利益も無い。」

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻三（五四頁b）

（B）『聯灯会要』巻四（続蔵一三六・二五二頁c）

〈注〉

①麻浴（谷）　山宝徹禅師＝一二一則注②既出。『三百則』諸本は「麻谷」に作るが、本則を引く『正法眼蔵』「現成公案」巻や、「観音」巻は「麻浴」に作る。

②風性常住、無処不周＝「風性常住、無処不周」は未検。『首楞厳経』巻三の次の一段をふまえるか。

阿難よ、風性に体無く、動静は常ならず。汝、常に衣を整えて大衆に入るに、僧伽梨の角、動きて傍人に及ばば、則ち微風有りて彼の人の面を払う。此の風、為復た袈裟の角より出ずるや、虚空より発するや、彼の人の面より生ずるや。阿難よ、此の風、若復し袈裟の角より出ずるとなれば、汝、乃ち風を披るなり。其の衣、飛揺して応に汝が体を離るべし。我れ今説法するに会中に衣を垂る。汝、我が衣を看よ、風、何所に在りや。応に衣中に蔵風の地有るべからず。若し虚空より生ずとなれば、汝が衣の動かざるとき、何に因りてか払うこと無き。空性常住なれば風応に常に生ずべし。若し風無き時は、虚空当に滅すべし。滅せん風は見るべきも、滅せん空は何の状ぞ。若し生滅有らば、虚空と名づけず。名づけて虚空と為さば、云何んが風の出でん。若し風、自ら払わるるの面より生ずとなれば、彼の面従り生じて、当応に汝を払うべし。汝の衣を整うるに自りて、云何んぞ倒しまに払わん。汝審かに諦観せよ、衣を整うることは汝に在り、面は彼の人に属す。虚空は寂然として流動に参わらず。風、誰れの方より鼓動して此に来る。風と空と性隔たりて、和にあらず合にあらず、応に風性は従るところ無くして自ら有るべからず。汝、宛かも知らず、如来蔵中の性風真空・性空真風、清浄本然にして、法界に周遍し、衆生の心に随い、所知の量に応ずることを。阿難よ、汝一人、微かに服衣を動ずれば、微風の出ずること有るが如く、遍法界に払わば、満国土に生ぜん。世間に周遍せば、寧んぞ方所有らんや。業に循って発現するのみ。世間の無知のもの、惑いて因縁及び自然性と為すも、皆な是れ識心の分別計度なり。但だ言説のみ有りて、都て実義無し。（大正一九・一一八頁a／荒木見悟『中国撰述経典二』筑摩書房・仏

教経典選一四・一九八六年・二四二頁）

③僧作礼＝本則を引く「現成公案」巻は、僧の作礼で引用が終わる。

④無用処＝用なし。やくたたず。用処は使いみち。『血脈論』、「今時の人、三五本の経論を講得して、以て仏法者と為す。愚人なり。若し自心を識得せざれば、閑文書を誦得するも都て用処無し」（大正四八・二七三頁ｃ）参照。

⑤師僧＝老師ではなく、修行僧・衆僧を尊んで言う。二七五則、「大潙、因みに陸侍御、僧堂に入るに乃ち問う、如許多の師僧、為復た是れ喫粥飯僧か、為復た是れ参禅僧か」。『祖堂集』巻七・雪峯義存章、「這裏に二三百の師僧有るは、尽く是れ仏法を学ぶ僧なり」（二八二頁）。

⑥一千箇＝『聯灯会要』は「一万箇」に作る。

《補注》

本則は『正法眼蔵』「現成公案」巻に引かれ、道元による拈提が行われているが、麻谷の最後の語（無用処師僧、著得一千箇、有什麼益）は省略されている。また、一二二則同様、本則も仮字『正法眼蔵』との高い相関関係ならびに推敲の跡が見られる。

金沢文庫本『正法眼蔵』	同上書き下し	「現成公案」（『聞書抄』）（『蒐書大成』一一・三六頁）
麻浴山宝徹禅師、一日使レ扇ヲ次デニ、有僧問フ、風性常住、無シ処トシテ不レ周ラ。和尚ナニトシテカマタエウセムスル為甚却揺扇。 師云、你ヂタダシリテ只知ニ風性常住ヲ一、且ラクズ不レ知ラ無ニ処不周ヲ一。 僧云、作麼生是レ無処不周底シュノ道理。	麻浴山宝徹禅師、一日扇ヲ使フ（使センス扇ノ）次デニ、有ル僧問フ、「風性常住、処トシテ周ラ不る無シ。和尚為ナニトシテ甚カ却タ（右・却ニ）揺扇スル。」 師云く、「你ヂ只ダ風性常住ヲ知リテ、且ラク無処不周ヲ知ラ不。」 僧云く、「作麼生是レ（是）無処不周底	麻浴山宝徹禅師、扇ヲ仕フチナミニ、僧キタリテ問、「風性常住、無処不周ナリ、ナニトシテカ更和尚扇ヲ仕フ。」 師云、「ナムヂ風性常住ヲシレリトモ、イマダトコロトシテイタラズトイフコトナキ道理ヲシラズ、」ト。 僧云、「イカナラムカコレ無処不周底ノ

師却ニ揺扇ス。
僧作レ礼ヲ。
師云、無用処師僧、著得一千箇、有ニ什麼益ノ一。

ノ道理。」
師却ニ（却タ）揺扇ス。
僧礼ヲ作ス（作礼ス）。
師云く、「無用処師僧、著得一千箇、什麼ノ益カ有ラム（無用処師僧、著得一千箇、有什麼益）。」

道理。」
師、扇ヲツカフノミナリ。
僧、礼拝ス。

「現成公案」（洞雲寺本）

麻浴山宝徹禅師、あふぎをつかふちなみに、僧きたりてとふ、「風性常住、無処不周なり、なにをもてかさらに和尚あふぎをつかふ。」師いはく、「なんぢたゞ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず」と。僧いはく、「いかならんかこれ無処不周底の道理。」ときに、師、あふぎをつかふのみなり。僧、礼拝す。

仏法の証験、正伝の活路、それかくのごとし。常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬをりもかぜをきくべきといふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆゑに、仏家の風は、大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇酪を参熟せり。（一・六〇頁）

〔二十四〕（124）深明見人牽網

深①明二上座，因到淮②河，見人牽③網，有④鯉魚透出。深曰：「明兄，俊⑤哉！一似箇衲僧！」明曰：「雖⑥然如此，争似当初不撞入網羅好。」深曰：「明兄，你⑦欠悟在。」明至半夜，方⑧省前語。

〈書き下し〉

深・明二上座、因ニ淮河ニ到ル。人ノ網ヲ牽クニ、鯉魚ノ透出スルコト有ルヲ見テ（右・見ル。）、深曰ク、「明兄、俊ナル哉。一ラ箇の衲僧ニ似タリ。」明曰ク、「然カモ此くの如くナリト雖ドモ、争ゾ当初ヨリ網羅ニ撞入セ不ラムガ好キニ似ム。」深曰ク、「明兄、你ヂ欠悟在（欠悟在）。」明、半夜ニ至テ、方サニ前ノ語ヲ省ラム。

〈現代語訳〉

深と明の二上座が、あるとき淮河のところに行った。人が漁網を牽いている最中、一匹の鯉がそれを突き抜けるのが見えた。深、「明師兄よ、見事だ！まるでいっぱしの禅僧のようだ。」明、「それはそうだが、はじめから網に飛びこまぬほうが、よほどよかろう。」深、「明師兄よ、あなたには悟りが欠けている。」明は深夜に至ってようやくはっと気がついた。

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻一〇（二一九頁a）

（B）『聯灯会要』巻二六（続蔵一三六・四三六頁a）

大慧『正法眼蔵』巻中（七九頁b）

〈注〉

①深明二上座＝『宗門統要集』巻一〇・目録「雲門嗣法一十四人」のうちに、「金陵奉先深禅師〈即深上座〉、金陵清涼明禅師〈即明上座〉」（二一一頁b）と見える。

②淮河＝中国中部の大河の一つ。河南省南端に初源し、東流して大運河・黄海・長江に分注する。

③牽網＝漁網をはって、魚を捕ること。『根本説一切有部毘奈耶』巻九、「百千万衆、倶に来たりて網を牽く」（大正二三・六六九頁a）。元・洪希文「仙邑館所帰渓行書触目」詩、「小舟、網を牽いて魚蝦を截つ」。

④有鯉魚透出＝五二則の次の話を参照。「三聖、雪峰に問う、網を透る金鱗、何を以てか食と為す。峰云く、汝の網を出で来るを待って汝に向いて道わん。師曰く、一千五百人の善知識なるに、話頭すら也お識らず。峰曰く、老僧は住持に事繁し」（『碧巌録』四九則・本則にも見ゆ）。「透網の金鱗」は一切の束縛・制約から超脱する禅者の喩え。しかし本則では逆に、鯉魚が漁網を透出した実景のほうを「透網金鱗」の禅者に重ね合わせている。

⑤俊哉、一似箇衲僧＝「俊哉」は痛快で胸のすくような見事さを讃える感歎の語。大慧『正法眼蔵』に前注と同じ話を挙げて、次のようにいう、「真浄和尚示衆。挙す、三聖、雪峰に問う、透網金鱗、何を以てか食と為す。峰云く、汝の網を出得し来るを待ちて、即ち汝に向いて道わん。三聖云く、一千五百人の善知識、話頭すら也お識らず。俊哉俊哉、快活快活、恰かも一隻の鷂子の鷺著くこと莫きに似たり」（八頁）。「一似…」は「まったく…のよう」の意。『碧巌録』三六則・本則評唱、「師叔は一

に箇の大虫に似たり。後来に人号して岑大虫と為す」（中・五九頁）。「衲僧」は、すぐれた修行僧。「衲僧家」、「衲子」とも。一九五則、「泉（南泉）云く、龍蛇ハ弁エ易シ、衲子ハ瞞じ（右・瞞ジ）難カリナム（難シ）」。『碧巌録』三則・頌古評唱、「直饒是れ頂門に眼を具し、肘後に符有る明眼の衲僧にして四天下を照破するも、這裏に到ればまた軽忽にすること莫れ」（上・七五頁）。

⑥雖然如此、争似当初不撞入網羅好＝「雖然如此（然カモ此くの如くナリト雖ドモ）」は、一八三則の「雖然如是（然モ是ノ如くナリト雖ドモ）」と同じ訓読。「雖然」は二字で「～といえども」の意の接続詞、「然雖」ともいう。「争似…」はここでは「争ゾ…ニ似ン」と訓むが、「似」は「如く」に同じで、「どうして…に及ぶだろう」、「…には及ばない」の意。「撞入」は勢いよく飛び込むこと。一一四則、「既ニ有リ、什麼ト為テカ、却タ這箇皮袋ニ撞入スル」。「網羅」は魚を捕る網だが、人を束縛するものの意もあり、ここではかけことばになっている。『景徳伝灯録』巻二九の誌公「十四科頌」の「解縛不二」に「二比丘有り、律を犯し、便ち却って往きて優婆に問う、優婆、律に依りて罪を説く、転た比丘の網羅を増せり」（六〇四頁b）。『禅関策進』「天目高峰原妙示衆」、「驀然として疑団を打破す。網羅の中に在って跳出するが如し」（筑摩書房・禅の語録一九・一九七〇年・七八頁）。

⑦你欠悟在＝「欠」は量的に不足なのではなく、当然あるべきものが欠落している、ということ。「在」は強意・断定の語気詞。入矢義高「禅語つれづれ」参照（『求道と悦楽―中国の禅と詩―』岩波書店一九八三年・一四九頁）

⑧方省前語＝一〇一則注⑨参照。「本来無事」に安住しているのは「悟」ではない。ひとたびは迷に陥り、そのうえで、その迷を突破してこそ「悟」となりうる。一二二則「玄則丙丁童子」の話と共通の旨趣と解したい。

《補注》

『正法眼蔵』には、この一則の全文及び段落の引用は見当たらない。ただし、「面授」巻では、「欠悟の道理」を取り上げている。水野弥穂子氏の注釈によれば、道元の「欠悟の道理」とは「全体仏法であるから悟りはいらなくなっている具体的な事実」であると説明する。

はかりしりぬ、「正法眼蔵」を面授し、「汝得吾髓」の面授なるは、たゞこの面授のみなり。この正当恁麼時、なんぢがひごろの骨髓を透脱するとき、仏祖面授あり。大悟を面授し、心印を面授するも、一隅の特地なり。伝尽にあらずといへども、いまだ欠悟の道理を参究せ

ず。（三・一五二頁）

また『永平広録』巻九・頌古七〇ではこの一則をほぼ全文引用している。

深明二上座、因ニ淮河ニ到ルニ、人ノ網ヲ牽ヲ見ル。鯉魚有テ透出ス。深曰ク、明兄俊ナル哉、箇衲僧ニ一似セリ。明曰ク、然モ是の如ト雖ドモ、争ンゾ当初網羅ニ撞入セ不ルガ好キニ似ン。深曰ク、明兄欠悟在。明、半夜ニ至テ方ニ省有リ。

淮河ノ流水深明ニ到ル、跳出セル金鱗本命生ケリ、此ノ命九折ニ帰ル無キガ如シ（如シ九折に帰る無クバ）、悄然トシテ見不大波ノ行。

（二・三四二頁）

〔二五〕（125）曹山如井覷驢

曹山本寂禅師問徳上座云：「仏真法身，猶若虚空。応物現形，如水中月。作麼生説箇応底道理？」徳云：「如驢覷井。」山云：「道即大煞道。只道得八九成。」徳云：「和尚又如何？」山云：「如井覷驢。」

〈書き下し〉

曹山本寂（本寂）禅師、徳上座（徳上座）ニ問テ云ク、「仏の真法身は、猶お虚空の若し。物に応じて形を現ず、水中の月の如し。作麼生カ箇応底ノ道理ヲ説ク。」徳云ク、「驢ノ井ヲ覷ルガ如シ。」山云ク、「道即大煞道（大煞道セリ）。只八九成ヲ道ひ得タリ（道得セリ）。」徳云く、「和尚又如何。」山云く、「井ノ驢ヲ覷ルガ如シ。」

〈現代語訳〉

曹山本寂禅師が徳上座に問うていった、「〝仏の真法身は、あたかも虚空のようなもの。物に応じて形を現すこと、水に映る月の如くである〟と説かれている。さて、その〝応ずる〟という道理をどう説くか。」徳、「驢馬が井戸をのぞくようなものです。」曹山、「言うことはなかなかだが、ただ、八九割を言い得たにすぎぬ。」徳、「では、和尚さまはどうなのです。」曹山、「井戸が驢馬をみるようなものだ。」

〈出典〉

（A）『宏智録』巻二・頌古五二（一〇一頁）

（B）『禅門拈頌集』巻二一（三六〇頁a）※道元が参照したか否かは未詳。

〈注〉

①曹山本寂＝八四〇～九〇一。洞山良价の法嗣。『祖堂集』巻八、『宋高僧伝』巻一三、『伝灯録』巻一七等に立伝。以下の話は、『碧巌録』八九則・本則評唱（下・一六五頁）にも見える。また、『禅林類聚』巻二（禅文化研究所影印本・五四頁a）や『大慧録』巻一四（大正四七・八七〇頁c）では洞山と蟾首座との問答としてこれを録す。

②徳上座＝未詳。『五灯会元』巻一三・曹山本寂章（続蔵一三八・二三九頁b）では「強上座」に作る。

③仏真法身…如水中月＝『金光明経』巻二・天王品、「仏の真法身は、猶お虚空の如し。物に応じて形を現ず、水中の月の如し」（大正一六・三四四頁b）。仏の三身（法身・報身・応身）のうちの応身のハタラキを言うものであるが、禅録では、仏性の無定型で応用自在なるさまを表す成句として用いられる。『馬祖の語録』、「在纏は如来蔵と名づけ、出纏は浄法身と名づく。法身は無窮にして、体に増減なく、能く大、能く小、能く方、能く円、物に応じて形を現じ、水中の月の如く、滔滔と運用して、根栽を立てず」（禅文化研究所一九八四年・四一頁）。

④如驢覷井＝「月」（理）と「水」（事）の関係を、そのまま日常卑俗のものに置き換えてみせた。「覷」は一一三則の注⑥を参照。

⑤道即…八九成＝前掲出典群では「八成」に作る。一〇五則に「道ハ即ち大煞道う、祇八九成ヲ（成ヲ）道ヒ得タリ」と見える。その注⑨～⑪を参照。

⑥如井覷驢＝法身が万物に投影するのではなく、万物のほうに法身を映し出すハタラキがあるのだ、という喩え。一次的な「法身」と、それを受動的に与えられるだけの二次的な現実という関係を反転し、現実の方に主体的・一次的な意味を与えたものではなかろうか。『臨済録』示衆の次の一段も、『金光明経』の同句を、「無依の道人」の能動的かつ無限定なハタラキを表現するものとして用いている。「仏境は自ら我れは是れ仏境なりと称すること能わず、還って是れ這箇の無依の道人、境に乗じて出で来たる。若し人有って出で来たって、我れに仏を求むれば、我れ即ち清浄の境に応じて出づ。人有って我れに菩薩を〔求むれ〕ば、我れ即ち慈悲の境に応じて出づ。人有って我れに菩提を〔求むれ〕ば、我れ即ち浄妙の境に応じて出づ。人有って我れに涅槃〔を求むれ〕ば、我れ即ち寂静の境に応じて出づ。境は即ち万般差別すれども、人は即ち別ならず。所以に物に応じて形を現じ、水中の月の如し」（六八頁）。

《補注》

『永平広録』巻五・上堂四〇三はこの全文を引用した後で、「師云く、驢、井ヲ覷、井、驢ヲ覷ル。井ハ井ヲ覷、驢ハ驢ヲ覷ル。身容心儀限リ無シ。応物現形余リ有リ。活眼環中、廓虚ヲ照ス、芥劫石、妙窮初。腰頭、縦ヒ風流袋ヲ帯ストモ、家裏ニ何ゾ一字ノ書無かラン」（上・四七〇頁）とし、映すものと映されるものが無い、空が空を映す、という意に発展させている。これはおそらく出典（A）の『宏智録』の頌、「驢、井を覷、井、驢を覷る。智容れて外無く、浄涵して余り有り。肘後誰か印を分かたん。家中書を蓄えず。機糸掛けず梭頭の事、文彩縦横意自ずから殊なり」を念頭においたものであろう。

〔二六〕（126）大巓良久機縁

韓愈文公、一日曰大巓云：「弟子、軍州事多。省要処、乞師一句。」巓良久。公罔措。時三平義忠禅師為侍者、乃敲禅床三下。巓云：「作麼？」平云：「先以定動、然後智抜。」（公）乃礼謝三平云：「和尚門風高峻。弟子於侍者辺、得箇入処。」

〈書き下し〉

韓愈文公、一日、大巓ニ曰シテ云ク、弟子、軍州事多シ（右・多シ）。省要ノ処、乞フ師、一句。巓良久ス。公措クコト罔シ。時キニ三平義忠禅師（三平ノ義忠禅師）侍者為リ。乃チ禅床ヲ敲ツコト三下ス。巓云く、作麼。平云ク、先ず定ヲ以て動ジ、然シテ後、智ヲモテ抜ク。（頭・公）乃チ三平ヲ礼謝シテ云ク、和尚、門風高峻ナリ。弟子、侍者ノ辺ニ於テ、箇入処ヲ得タリ。

〈現代語訳〉

韓愈文公が、ある日、大巓和尚に申し上げた。「わたくしは、知事の務めが多忙です。肝心かなめの処を、和尚さま、どうか一句お願いいたします。」大巓は沈黙によってそれに応えた。文公はお手上げであった。その時、三平義忠禅師が侍者であったが、それが禅床を、コツコツコツとたたいた。大巓、「何のつもりだ。」三平、「"まず禅定によって揺さぶって、しかる後に智慧によって抜き取る"というやつです。」文公はそこで三平に礼謝して言った。「和尚さまは、教えがあまりにも高く峻しい。わたくしは、侍者どののあたりでいささかの手がかりを得ました。」

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻七（一五四頁b）

（B）『聯灯会要』巻二〇（続蔵一三六・三七七頁d）

〈注〉

①韓愈文公＝七六八～八二四。字は退之。文公は謚。仏舎利を迎えいれた憲宗（位八〇五～八二〇）に対し、元和一四年（八一九）に「仏骨を論ずる表」を上奏して潮州（広東省）に流された。『祖堂集』巻五・大巓宝通章は、その左遷先の潮州で大巓と出あって帰依したと伝え、そこに録された問答のなかに本則も見える。なお、一七三則には韓愈と憲宗の問答が取り上げられる。羅香林「大巓惟儼与韓愈李翺関係考」（『唐代文化史』台湾商務印書館公司一九六八年）参照。

②大巓＝大巓宝通（七三二～八二四）。石頭希遷の法嗣。『祖堂集』巻五、『伝灯録』巻一四等に語を録すが、『伝灯録』は韓愈との交渉を伝えない。

③省要処＝くだくだしきことのない、仏法の端的な核心。『碧巌録』四五則・本則評唱、「仏法省要の処、言多きに在らず、語繁きに在らず」（中・一四二頁）。

④罔措＝一〇一則注⑦参照。

⑤三平義忠＝七八一～八七二。大巓宝通の法嗣。漳州（福建省）三平山に住す。『祖堂集』巻五、『伝灯録』巻一四に語を録し、『全唐文』巻七九一に「漳州三平大師碑銘並序」がある。

⑥先以定動、然後智抜＝まず手で揺さぶってそれから木を引き抜くように、悟りを得るには、まず禅定を修し、その上で智慧をもって完成する、という意。北本『大般涅槃経』巻三一・師子吼菩薩品、「善男子、菩薩摩訶薩、二法具足して能く大いに利益す。一は定、二は智なり。善男子、菅草を刈るに執ること急なれば則ち断つが如く、菩薩摩訶薩の是の二法を修するも亦復た是くの如し。善男子、堅木を抜くに先に手を以って動かさば、後に則ち出だすこと易きが如く、菩薩の定慧も亦復た是くの如し。先に定を以って動かし、後に智を以って抜く」（大正一二・五四八頁b）。ここでは、師のようにいきなり第一義の沈黙（「良久」）を示しても解るまいから、まず「敲禅床三下」という方便で韓愈の既成観念を動揺させ、第一義への端緒を示してやったのだというこころ。

⑦得箇入処＝悟りの手がかりを得ること。一三二則、「仁（本仁）云く、且道スラクハ、汝ガ為ニ説ク。汝に答える話、若シ人弁得セバ、你ニ箇の入処有ルコトヲ許サム」。『碧巌録』一二則・本則評唱、「峰、遂に挙す、塩官の上堂に色空の義を挙するを見て箇の入処を得たり。頭云く、此去三十年、切に忌む挙著することを。峰又た挙す、洞山過水の頌を見て箇の入処を得たり。頭云く、若し与麼なれば自ら救い了らず」（上・二九二頁）。

〔二七〕（127）文殊前三後三

①文殊問無②著：「近③離甚処？」著云：「南④方。」殊云：「南方仏法，如何住⑤持？」著云：「末⑥法比丘，少奉戒律。」殊云：「多少衆？」著云：「或⑦三百，或五百。」著問文殊：「此間仏法，如何住持？」殊云：「凡聖同居，龍⑧蛇混雑。」著云：「多少衆？」殊云：「前⑨三々，後三々。」

〈書き下し〉

文殊、無著ニ問フ、「近離甚処。」著云く、「南方。」殊云ク、「南方ノ仏法、如何住持スル。」著云く、「末法ノ比丘、戒律ヲ奉ズルコト少ナシ。」殊云く、「多少ノ衆ゾ。」著云く、「或ハ三百、或ハ五百。」著、文殊ニ問フ、「此間（此間ノ）仏法、如何住持スル。」殊云ク、「凡聖同居シ、龍蛇混雑ス。」著云く、「多少の衆ぞ。」殊云く、「前三々、後三々。」

〈現代語訳〉

文殊が無著に問うた、「どこから来た。」無著、「南方です。」文殊、「南方の仏法は、どのように行じられておる。」無著、「末法の修行者は、戒律を守ることがまれです。」文殊、「修行僧の数はどれくらいか。」無著、「三百、五百と数だけはもう。」つぎに無著が文殊に問うた、「こちらの仏法は、どのように行じられておりますか。」文殊、「凡と聖が同居し、優れた者も凡庸な者もいっしょくただ。」無著、「どれくらいですか。」文殊、「前に三つ三つ、後に三つ三つ。」

〈出典〉

（A）『如浄録』巻下（大正四八・一二七頁c）

（B）『雪竇頌古』三五（一〇四頁／『碧巌録』三五則）

『大慧録』巻二（大正四七・八一六頁a）

〈注〉

①文殊＝五台山（清涼山）にいると信ぜられた文殊菩薩のこと。『臨済録』示衆、「一般の学人有り、五台山裏に文殊を求む。早く錯り了れり也。五台山に文殊無し。你、文殊を識らんと欲すや。祇だ你が目前の用処、始終不異、処処不疑なる、此箇れは是れ活文殊なり」（六五頁）。ただし、『雲門広録』巻上には「生縁若し北に在らば、北に趙州和尚・五台文殊有り、総て這裏に在り。生縁若し南に在らば、南に雪峰・臥龍・西院・鼓山有り、総て這裏に在り」（大正四七・五四九頁c）とあり、五台文殊が趙州従諗ら歴史的人物と並列されている。この五台文殊については未詳。なお本則は補注①所引の『広清涼伝』に伝えられるような、二種の伝承を合糅して成ったものかも知れない。

②無著＝華厳無著（生没年未詳）のこと。牛頭宗六世・慧忠（六八三～七六九）の法嗣。『宋高僧伝』巻二〇、『広清涼伝』巻中に立伝される。

③近離甚処＝近ごろ甚処を離れしや。ここに来る前、どこの寺で（どの老師の所で）修行してきたのか、ということ。そこで何を掴んできたか、という意をしばしば含む。金沢文庫本・四一則（他本に無し）、「米胡僧ニ問フ、近離ハ甚ノ処ゾ。云く、薬山。師云く、薬山老子、近日如何」。『三百則』四二則、「鏡清、僧に問う、近ごろ甚処を離れしや。曰く、三峰。夏、甚処に在りや。曰く、五峰。師曰く、你に三十棒を放す。曰く、某甲、過甚処に在りや。云く、你為た一叢林を出るや、一叢林に入るや」。

④南方＝仏法という格別奇特のモノ―いわばカッコつきの「仏法」―が盛んに行われている所という含みをもつ。二三九則、「趙州和尚衆に示して云く、兄弟、若し南方従り来らば、即ち与に下載し、若し北方従り来らば、即ち与に装載す」。一〇四則、「徳山和尚、長ニ金剛経を講ズルヲ業ト為ス。後チニ南方ニ禅宗大ク興ズルヲ聞クニ、其ノ由を措クコト罔シ。遂ニ講ヲ罷メ徒ヲ散ジ、疏鈔ヲ携エテ南遊ス」。『碧巌録』九八則・本則、「我当初行脚の時、業風に吹かれて思明長老の処に到る。連けざまに両錯を下し、更に我を留めて夏を過し、我と共に商量せんと待す。我、恁麼の時、錯と道わざりしも、我、発足し南方に去く時には、早に知道り、錯了也、と」（下・二四二頁）。

⑤住持＝仏法をたもち実践すること。寺院の住職の意ではない。『景徳伝灯録』巻九・薦福弘弁章、「沙門釈子の仏を礼し経を転ずるは、蓋し是れ常法を住持せるのみにして、四報有り焉。然れば仏戒に依りて身を修め、知識に参尋し、梵行を漸修し、

如来所行の跡を履践するなり」（一四四頁a）。王梵志詩「寺内数箇尼（〇二六）」、「一一仏教に依り、五事惣て合に知るべし。看る莫れ他ら破戒すと、身自ら牢として住持せるに」。詳しくは項楚『王梵志詩校注』一一二頁注六（上海古籍出版社一九九一年）を看よ。

⑥末法比丘、少奉戒律＝「少」は少しいるというより、ほとんど居ない、極めてまれ、ということ。

⑦或三百、或五百＝三・五は実数でなく概数。三百・五百は有象無象の修行僧がむやみに数ばかりいる、という語感。『臨済録』示衆、「道一和尚の用処の如きは、純一無雑なり。学人三百五百、尽く皆な他（馬祖）の意を見ず」（一一六頁）。

⑧龍蛇混雑＝玉石混交しているさま。釈道安「阿毘曇序」、「龍と蛇と淵を同じくし、金と鍮と肆を共にする者、彬彬如たり也」（『出三蔵記集』巻一〇・中華書局標点本三七七頁／大正二六・七七一頁a）。『降魔変文』、「故に知る、真金と濫鍮と、目験して分析し、龍と蛇と渾雑して、方めて其の能を弁ず、と」（項楚『敦煌変文選注』巴蜀書社一九八九年・五七七頁）。

⑨前三々、後三々＝『玄沙広録』巻中に「麟上座に問う、什麼生と好き一院ぞ、幾寮の舎有りや。麟云く、前六後六」云々という問答がある（禅文化研究所訳注本・中・一五〇頁）。ここから入矢義高「無著道忠の禅学」は、表面上は僧堂の棟数を表しつつ、実はそこに住まう修行僧の内実を問題としている語だとする（『空華集』思文閣出版一九九二年・二〇二頁／また『禅語辞典』「序」三頁、二六〇頁b参照）。ここはより具体的には、補注①『広清涼伝』巻中・一五に引く「東廊六院」「西廊六院」のことを指しているかも知れぬ。なお『三百則』「序」の次の例も、修行者の数の多さを言うものの如くである。「大師釈尊已に拈挙す矣。拈得し尽せる也未。直に二千一百八十余歳を得。法子法孫、近流遠派、幾箇万万、前後三々なり」。

《補注①》

『広清涼伝』巻中・無著和尚入化般若寺十三

……大暦二年（七六七）正月、跡を浙右に発す。夏五月の初め、清涼嶺下に至る。時に日暮れ、倏ち化寺を見る。鮮華絶止す。因りて扉を扣き入らんことを請う。一童子の胸旨と名づくる者有りて、啓き出でて応ず。無著、童子に請うて、入りて寺主に白せしむるに、昏夜寓宿せんことを以てす。童子、報を得て無著を延きて入らしむ。主僧の賓接すること、人間の礼の如し。問うて曰く、「師は何自り来れるや。」無著、具さに対う。又た曰く、「彼方の仏法は何如。」答う、「時、像季に逢うも、分に随って戒律す。」復た問う、「衆は幾何か有る。」曰く、「或いは三百、或いは五百。」無著曰く、「此処の仏法は如何。」答えて云く、「龍蛇混跡し、凡聖同居す。」又た問う、「衆幾何

か有る。」答えて云く、「前三三と後三三（前三三与後三三）。」無著乃ち良久し対うる無し。主僧云く、「解す否。」答えて云く、「解せず。」主僧云く、「既に解せざれば、速やかに須く引去すべし。宜しく久しく止まること無かれ。」童子に命じて、客を送りて門を出でしむ。無著問うて曰く、「此の寺、何と名づくや。」答う、「清涼寺。」童子曰く、「早来に問う所の前三三と後三三、師解すや否。」曰く、「能はず。」童子曰く、「金剛の背後に、爾之を覷るべし。」師乃ち廻り視るに、化寺即ち隠る。無著、愴然たること之を久しくし、即ち傷を説きて曰く、「沙界に廓周き聖伽藍。満目の文珠、接して話譚す。言下に知らず、何なる印を開くかを。云く、頭を廻らせば祇だ見ゆる、旧山の巌。」無著既に出で、坐して旦を待ち、天暁に路に即く。是の月の望日、華厳寺の衆堂に届って安止す。（大正五一・一一一一頁c）

『同』巻中・道義和尚入仮金閣寺十五

……少選して、大聖、義（道義）に謂いて曰く、「阿師は江東従り来る。彼処の仏法は如何。」義曰く、「末法の住持、戒律を奉ずること少なり。若し目証するに非ざれば知るべからざらん也。」大聖言く、「善き哉。義として此方に因って敢て咨問せり。」和尚に謂て曰く、「此中の仏法は如何。」大聖曰く、「此中の仏法、凡聖同居するも、名相に在らず、但だ縁に随って物を利すれば、即ち是れ大乗なり。」義曰く、「和尚の寺舎は尤も広し。目に触るるもの皆な是れ黄金より成る所、愚情には測度る能わず、不思議と謂う可き者なり也。」大聖曰く、「然り。」遂て覚一（童子の名）をして茶及び薬食を将ち来らしむ。既に至るや、義に命じて啜り食らわしむ。香味は芬馥にして、迴かに常味に殊なる。食し已るや、大聖復た覚一を召し、阿師を送りて十二院に遊ばしむ。義、覚一と諸院を遍歴して修謁す。大食堂の前に至るに、多く僧侶有り、或いは禅、或いは律、若しくは坐し、若しくは行く。数、約そ万に盈つ。或いは復た礼を受け、或いは相い承接する者あり。十二院の題額は各おの異る。

東廊の六院　大聖菩薩院・観音菩薩院・薬王菩薩院・虚空蔵菩薩院・大慧菩薩院・龍蘂菩薩院

西廊の六院　普賢菩薩院・大勢至菩薩院・薬上菩薩院・地蔵菩薩院・金剛慧菩薩院・馬鳴菩薩院

義、巡謁し畢るに、老僧、義を遣りて早く帰らしむ、寒山住み難し、と。道義遂て老僧に辞し、寺を出ずること百歩、廻顧れば已に所在を失う。但だ空山の喬木ある而已にして、方めて化寺なりしことを知る。遂て長安に迴る。（大正五一・一一一三頁c）

《補注②》

『碧巌録』三五則・本則評唱（『汾陽録』中・大正四七・六〇九頁c参照）

無著、五台に遊ぶ。中路荒僻たる処に至り、文殊、一寺を化して他を接えて宿せしむ。遂に問う、「近ごろ甚処を離れしや。」著云く、「南

方。」殊云く、「南方の仏法、如何にか住持する。」著云く、「末法の比丘、戒律を奉ずるもの少なり。」殊云く、「多少の衆ぞ。」著云く、「或は三百、或は五百。」無著却って文殊に問う、「此間にては如何にか住持する。」殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雑す。」著云く、「多少の衆ぞ。」殊云く、「前三三、後三三。」却に茶を喫するに、文殊、玻璃の盞子を挙起げて云く、「南方に還た這箇有りや。」著云く、「無し。」殊云く、「尋常什麼を将てか茶を喫す。」著、語無し。遂に辞し去る。文殊、均提童子をして送り門首に出でしむ。無著、童子に問うて云く、「適来に道う〝前三三、後三三〟と。是れ多少ぞ。」童子云く、「大徳」と。著、応喏す。童子云く、「是れ多少ぞ。」又た問う、「此れは是れ何なる寺ぞ。」童子、金剛の後面を指す。著、首を回すや、化寺と童子と悉く隠れて見えず、只だ是れ空谷なり。彼処をば後来に之を金剛窟と謂う。（中・五一頁）

《補注③》

道元の著述中に、本則の全文引用は見られないが、「前三々、後三々」や「前後三々」については、次のような例が見られる。

仮字『正法眼蔵』

「仏性」巻、「六神通はたゞ阿笈摩教にいふ六神通にあらず。六といふは、前三々後三々を六神通ハラ蜜といふ。しかあれば、六神通は明々百草頭、明々仏祖意なりと参究することなかれ。六神通に滞累せしむといへども、仏性海の朝宗に罣礙するものなり」（一・八〇頁）。

「空華」巻、「仏祖にあらざれば華開世界起をしらず。華開といふは、前三々後三々なり。この員数を具足せんために、森羅をあつめていよゝかにせるなり」（一・二六八頁）、「六根はたとひ眼耳鼻舌身意なりとも、かならずしも三三にあらず、前後三三なるべし」（一・二七六頁）。

「都機」巻、「諸月の円成すること、前三々のみにあらず、後三々のみにあらず。円成の諸月なる、前三々のみにあらず、後三々のみにあらず」（二・八七頁）、「しかあれば、心は一切法なり、一切法は心なり。心は月なるがゆゑに、月は月なるべし。心なる一切法、これことごとく月なるがゆゑに、遍界は遍月なり。通身ことごとく通月なり。たとひ直須万年の前後三三、いづれか月にあらざらん」（二・九〇頁）。

「面授」巻、「まのあたり釈迦牟尼仏をみたてまつる正法を正伝しきたれるは、釈迦牟尼仏よりも親曾なり。眼尖より前後三三の釈迦牟尼仏を見出現せしむるなり。かるがゆゑに、釈迦牟尼仏をおもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授正伝をおもくし尊崇し、難値難遇の敬重礼拝すべし」（三・一四八頁）。

「大修行」巻「老人道のごときは、過去迦葉仏のとき、洪州百丈山あり。現在釈迦牟尼仏のとき、洪州百丈山あり。これ現成の一転語なり。かくのごとくなりといへども、過去迦葉仏時の百丈山と、現在釈迦牟尼仏時の百丈山と、一にあらず異にあらず、前三々にあらず後三々にあらず。過去の百丈山きたりて而今の百丈山となれるにあらず、いまの百丈山さきだちて迦葉仏時の百丈山にあらざれども、「曾住此山」の公案あり」（三・三六九頁）。

『永平広録』

巻一〇・偈頌六二、「野助光ガ大宰府ニ帰ルニ与フ。全身転ル処見ルニ外無シ、前後三三歩ミ未ダ休セず、更ニ祖門奇特ノ事有リ、長天一様ニ月西ニ流ル」（下・四一〇頁）。

〔二八〕（128）百丈入理之門

①百丈禅師，因②普請鋤地次，有一僧③挙起鋤頭，忽聞鼓鳴，乃抛下（鋤），大笑便帰。師云：「④俊哉！此是観音入理之門。」帰院乃喚其僧問：「⑤適来見什麼道理，便⑥与麼？」僧云：「適来肚飢，聞鼓声，⑦帰喫飯去。」師乃⑧大笑。

〈書き下し〉

百丈（百丈）禅師、因ニ普請して、地ヲ鋤ク（鋤地スル）次デニ、一リノ僧有テ、鋤頭ヲ挙起スルニ、忽ニ鼓ノ鳴ルヲ聞テ、乃チ（右朱・鋤を）抛下シテ、大いに笑フテ便チ帰ル。師云く、「俊ナル哉、此ハ是レ観音入理之門ナリ。」院ニ帰りテ乃チ其ノ僧ヲ喚ぶニ問フ、「適来什麼ナル道理ヲ見テカ、便チ与麼ナル。」僧云く、「適来肚飢、鼓ノ声ヲ聞テ、帰テ喫飯ス〈去〉。」師、乃チ大笑ス。

〈現代語訳〉

百丈禅師があるとき大衆とともに作務をして、田を耕していた時のこと。一人の僧が鋤を振り上げたひょうしに、突如太鼓の鳴る音が聞こえた。彼はそこで鋤を放り捨て、大笑いしてそのまま寺に帰ってしまった。百丈、「見事！これぞ観音入理の法門だ。」寺院に戻ってから、その僧を喚んで尋ねた。「先ほどはどのよう道理を見て、ああしたのか。」僧、「先ほどは腹が減っていたところへ太鼓の音が聞こえまして、それで飯を食いに戻ったのです。」百丈はそこで大笑いした。

〈出典〉

（A）『宗門統要集』巻三（五八頁a）

（B）『景徳伝灯録』巻六（九八頁b）

『聯灯会要』巻四（続蔵一三六・二四九頁b）

〈注〉

①百丈禅師＝百丈懐海のこと。一〇二則の注①参照。その左傍訓に「ハシヤム」の訓みが見える。

②普請＝普く寺衆を請し作務すること。『景徳伝灯録』巻六・百丈懐海章引「禅門規式」、「普請の法を行うは、上下の力を均しくするを示すなり」（一〇一頁b）。『大宋僧史略』巻上・別立禅居、「宗とす可き者、之を長老と謂う。随従する者、之を侍者と謂う。事を主どる者、之を寮司と謂う。共に作す者、之を普請と謂う」（大正五四・二四〇頁b）。

③挙起鋤頭、忽聞鼓鳴、乃抛下（鋤）、大笑便帰＝「乃抛下鋤」の「鋤」字は朱筆添加。『宗門統要集』では「乃抛下大笑便帰」に作る。

④俊哉！ 此是観音入理之門＝「俊哉」は一二四則⑤に既出。「観音入理の門」とは一切の音声を道への入り口とする考え。『碧巌録』七八則・本則評唱、「…一切処都て是れ観音入理の門なり。古人も亦た聞声悟道、見色明心有り」（下・六八頁）、『宏智録』巻三・上堂五一、「松風流水、是れ観音入理の門なり。野草幽華、乃ち普賢発機の境なり」（一六七頁）。その背景には次のような説があるであろう。『景徳伝灯録』巻二一・安国慧球章、「師、上堂して衆に謂いて曰く、我、此間の粥飯の因縁をば兄弟の為に挙唱することは、終に是れ常には欲得せず。省要は却って是れ山河大地、汝が与に発明す。其の道、既に常にして、亦た能く究竟す。若し文殊門従り入る者は、一切の無為、土木瓦礫、汝の機を発するを助く。若し観音門従り入る者は、一切の音響、蝦蟇蚯蚓、汝の機を発するを助く。若し普賢門従り入る者は、歩みを動さずして到る。我、此の三門の方便を以て汝に示す」（四二〇頁b）。『同』巻二六・瑞鹿本先章、「又た云く、天台の教中に文殊・観音・普賢の三門を説く。文殊の門は一切の色。観音の門は一切の声。普賢の門は歩みを動さずして到る。我は道う、文殊の門は是れ一切の色にあらず、観音の門は是れ一切の声にあらず、普賢門は是れ箇の什麼ぞ、と。道うこと莫れ、天台教の説話に別却す、と。無事、且く退け」（五四五頁b／ただし、天台の教説のなかにこれの根拠は見出せない）。

⑤適来＝今しがた、先ほど。一六八則、一九三則は皆な「適来」と訓む。『碧巌録』五三則・本則評唱、「侍者云く、你適来は哭し、而今は為什麼にか却って笑う。丈（百丈）云く、我適来は哭し、如今は却って笑う」（中・二一一頁）。

⑥与麼＝このように、そのようにの意。底本では「ヰモ」と訓む。一〇一則注⑥参照。

⑦帰喫飯去＝ここの「去」は置き字として扱われている。一〇八則注④参照。

⑧大笑＝僧は太鼓をただ太鼓として聞いていただけ、自分は一人ずもうをとって、一人でこけていただけだった！　僧の屈託なきふるまいに「観音入理の門」などということさらなる意味づけをし、ひとり感動していた自分が、アホらしいやら、可笑しいやら。

《補注》

『正法眼蔵』には、本則の引用は見当たらない。ただし、「観音」巻末尾に次のように見える。

いま仏法西来よりこのかた、仏祖おほく観音を道取するといへども、雲巌・道吾におよばざるゆゑに、ひとりこの観音を道取す。永嘉真覚大師に、「不見一法名如来、方得名為観自在」の道あり。如来と観音と、即現此身なりといへども、他身にはあらざる証明なり。麻浴・臨済に正手眼の相見あり。許多の一々なり。雲門に見色明心、聞声悟道の観音あり。いづれの声色か見聞の観世音菩薩にあらざらん。百丈に入理の門あり、楞厳会に円通観音あり、法華会に普門示現観音あり。みな与仏同参なり、与山河大地同参なりといへども、なほこれ許多手眼の一二なるべし。（一・四三〇頁）

※　※

後記

駒澤大学禅研究所・外国語禅籍研究班の報告として、ここに「金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究（三）」を提出する。手探りで始めたこの共同研究も約三年をへ、班員一同なかなかにウデをあげて、資料を博渉した高水準の原稿を用意してくれるようになってきた。おかで毎回の会読はすこぶる啓発に富み、作業の進行も順調である。

今回の会読資料および初稿作成の分担は次のとおりで、その後、池上と小川が共同で原稿の整理を行った。

一一五―小早川　一一六―林　一一七―池上　一一八―三宅　一一九―林
一二〇―池上　一二一―三宅　一二二―小早川　一二三―池上　一二四―林
一二五―三宅　一二六―小早川　一二七―池上　一二八―林

原稿整理の段階では、主として池上が訓読文、和語の注釈、補注、小川が現代語訳と漢語の注釈というけもちで、それぞれ点検と訂補を行った。随時、意見を交換しながら作業をすすめ、池上の努力によって相当の充実がもたらされたが、最終的には小川の判断で稿を定め、とくに訳文の修改と問答の解釈は全面的に小川の独断によっている。よって内容理解や文章表現におかしいところがあれば、むろん、すべて小川の責任である。忌憚なきご指正をお願い申し上げます。

二〇〇三年七月一一日　小川隆　記